

ORIGAMI

TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

クローズアップ Close-up

8OSME 2024 メルボルン報告

A Report: 8OSME 2024 in Melbourne

宮本好信

Miyamoto Yoshinobu

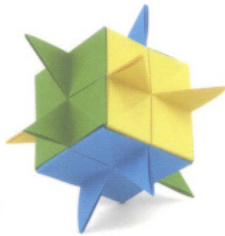
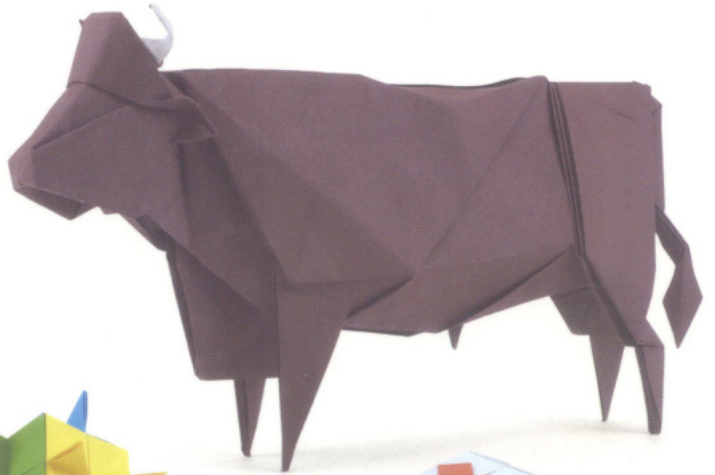
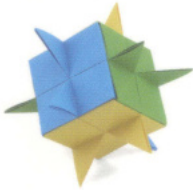
折り図 Diagrams

和牛

Wagyu Bull

小松英夫

Komatsu Hideo



おりがみ我楽多市 Origami Odds and Ends

「ハクトウワシ」大内康治

Bald Eagle: Ouchi Koji

展開図折りに挑戦! Crease Pattern Challenge!

「ねずみ(立ち姿)」霞 誠志

Mouse (Standing): Kasumi Seishi

ユニット折り紙カルテット Modular Origami Quartette

「猫耳キューブ」「ハートの小箱」前川 淳

Cat Ear Cube, Casket of Hearts: Maekawa Jun



通巻 **207** 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

● 折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING



谷折り線

Line indicating valley fold



山折り線

Line indicating mountain fold



手前に折る

Fold paper forwards



後ろへ折る

Fold paper backwards



折り筋をつける

Making a crease line



段折り

Pleat fold



裏返す

Turn paper over



引き出す

Pull out



図の見る位置が変わる

Rotation



図が大きくなる

A magnified view



見えないところ

A hidden line



押す、押しつぶす

Push paper in



切る

Cut

表紙掲載作品: 「猫耳キューブ、ハートの小箱」 創作: 前川 淳, 「ハクトウワシ」 創作: 大内康治, 「和牛」 創作: 小松英夫, 「ねずみ(立ち姿)」 創作: 霞 誠志

"Cat Ear Cube, Casket of Hearts" by Maekawa Jun, "Bald Eagle" by Ouchi Koji, "Wagyu Bull" by Komatsu Hideo, "Mouse (Standing)" by Kasumi Seishi

ORIGAMI TANTEIDAN
折紙探偵団
MAGAZINE
CONTENTS

No. **207**



Mouse (Standing): Kasumi Seishi

クローズアップ / Close-up

P.14 8OSME 2024

メルボルン報告

A Report: 8OSME 2024 in Melbourne

宮本好信

Miyamoto Yoshinobu

折り図・展開図 / Diagrams and Crease Pattern

P.27 和牛

Wagyu Bull



小松英夫

Komatsu Hideo

P.39 展開図折りに挑戦!

Crease Pattern Challenge!

ねずみ(立ち姿)

Mouse (Standing)

霞 誠志

Kasumi Seishi

カラーページ / Color

P.20 オリガミ・フォトギャラリー

Origami Photo Gallery

今号の折り図・展開図掲載作品より
Models Based on Diagrams and Crease
Patterns of This Issue

解説・前川 淳

Comments: Maekawa Jun

P.22 第29回折紙探偵団コンベンションより

From the 29th Origami Tanteidan
Convention

P.26 第14回韓国折紙コンベンションより

From the 14th KOREA Origami
Convention

折り図 / Thematic Series with Diagrams

P.4 ユニット折り紙カルテット

Modular Origami Quartette

猫耳キューブ、ハートの小箱

Cat Ear Cube, Casket of Hearts

前川 淳

Maekawa Jun

P.8 おりがみ我楽多市

Origami Odds and Ends

ハクトウワシ

Bald Eagle

大内康治

Ouchi Koji

読み物 / Articles

P.16 ぼくらは折紙探偵団

Here We Are, THE ORRRIGAMI TANTEIDAN

第29回折紙探偵団東京コンベンション
並びに韓国、BOSコンベンション報告

Report on the Three Conventions:
The 29th Tanteidan, Korean, and BOS

合谷哲哉

Gotani Tetsuya

P.18 折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

『おりがみ新世紀』笠原邦彦 著

"Origami, La Era Nueva" by Kasahara Kunihiko

飯屋 寛寛

Kariyazono Kango

コラム / Columns

P.7 折り紙の周辺

Origami and Its Neighbors

布施知子

Fuse Tomoko

P.17 マコトか。

～やまぐち真の回想録～

Makoto or Not?: Memoirs by Yamaguchi Makoto

やまぐち真

Yamaguchi Makoto

P.37 おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

平原祐輔

Hirahara Yusuke

P.38 折り紙千夜一夜

One Thousand and One Nights of Origami

前川 淳

Maekawa Jun

情報 / Information

P.40 つまみおり Rabbit Ear

Modular Origami Quartette

ユニット折り紙

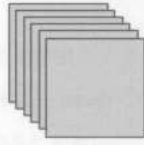
カルテット

四重奏

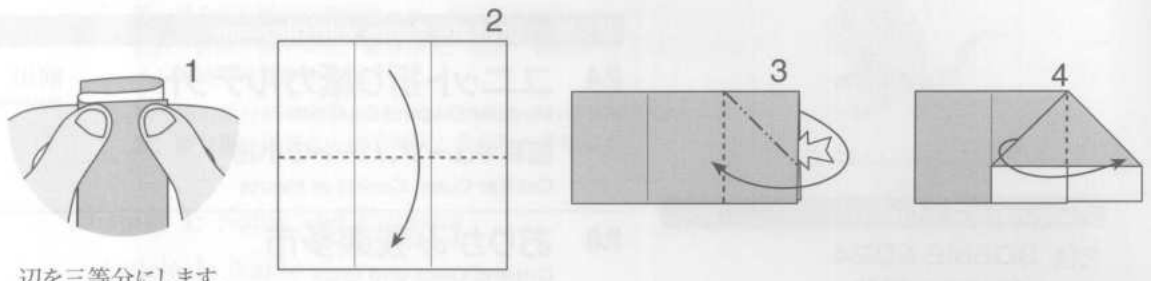
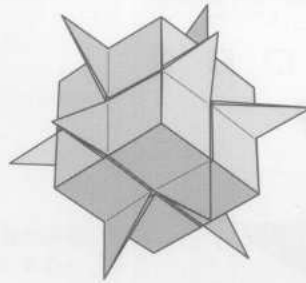
前川淳
MAEKAWA Jun

猫耳キューブ

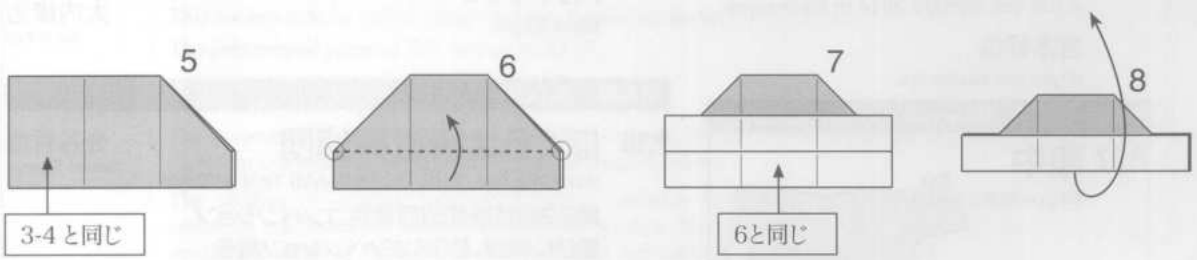
Cat Ear Cube



正方形6枚

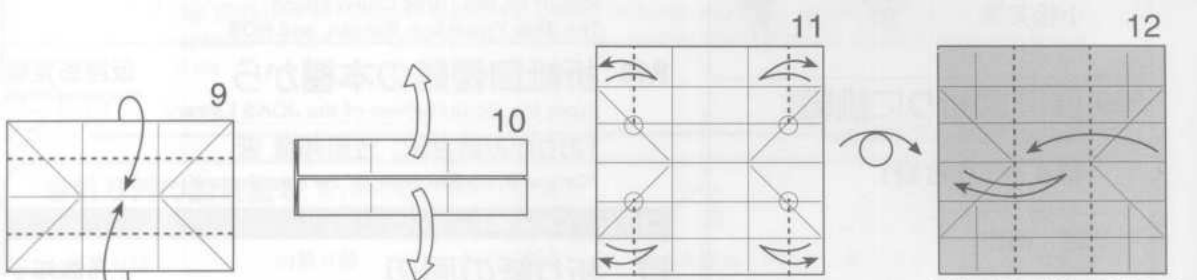


辺を三等分にします。

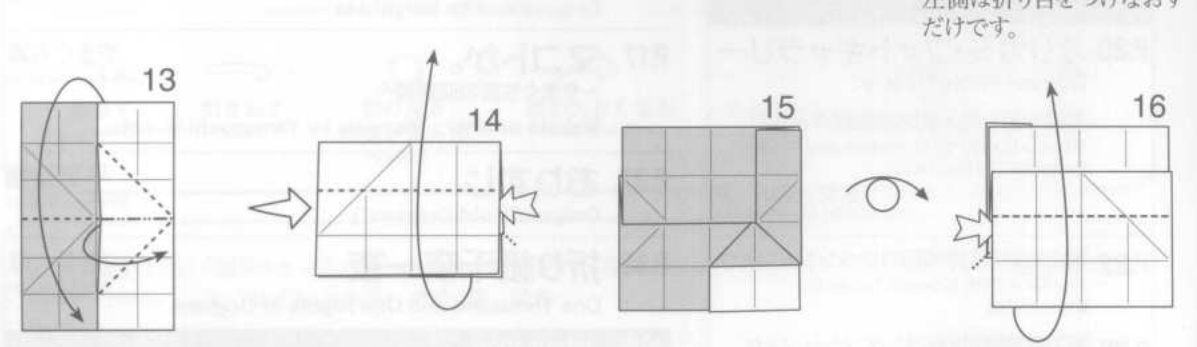


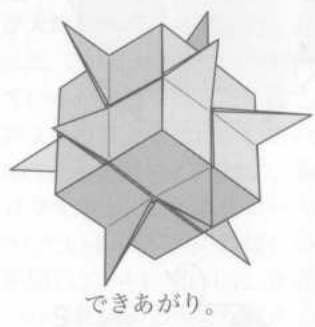
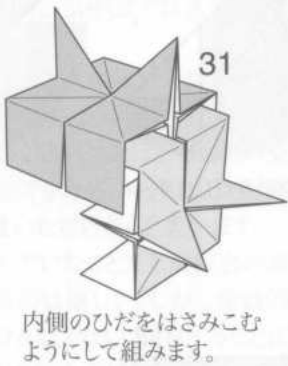
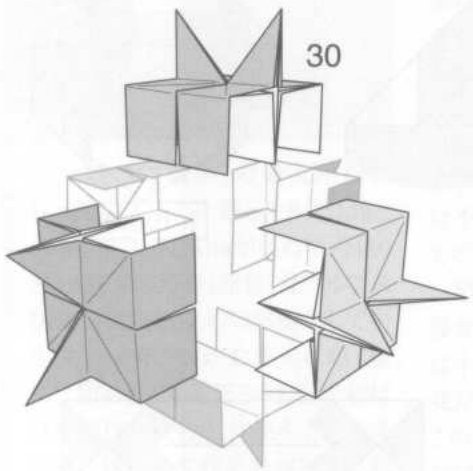
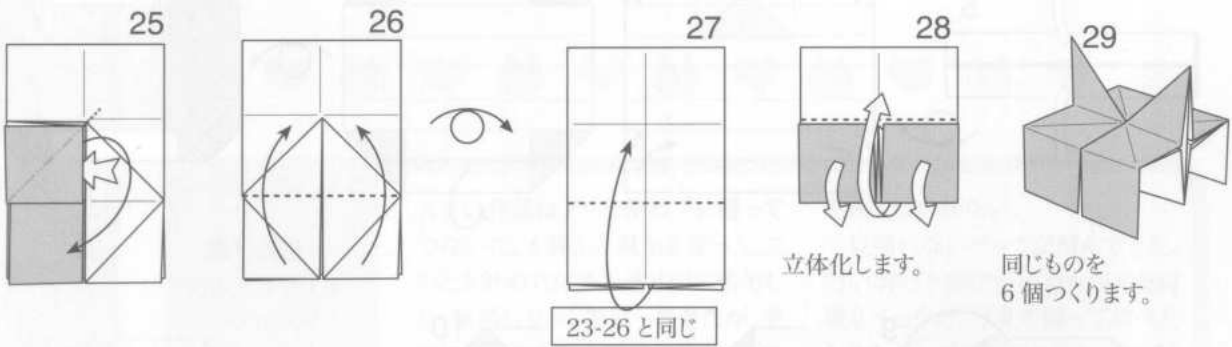
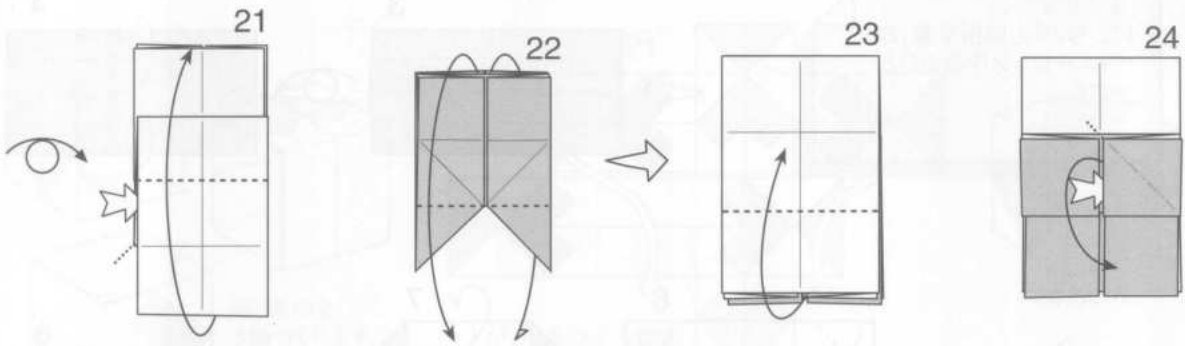
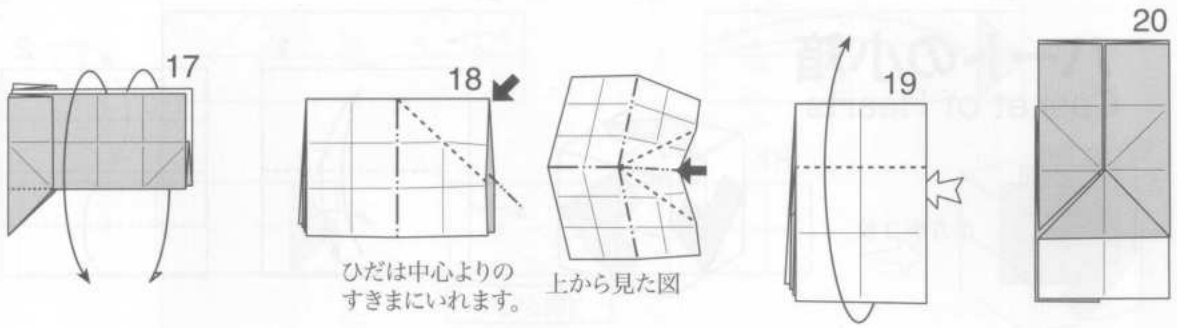
3-4と同じ

6と同じ

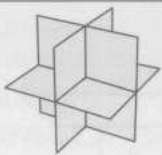


左側は折り目をつけなおすだけです。



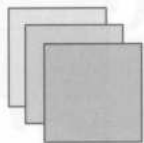


この作品の特徴のひとつは、内部に3次元のデカルト座標(XYZ座標)を内包していることです。

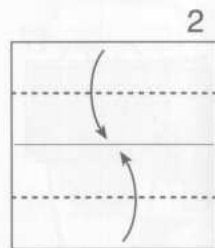
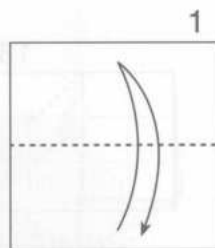
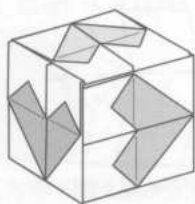


ハートの小箱

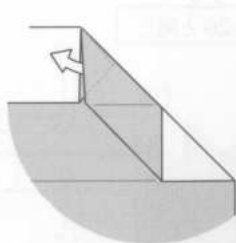
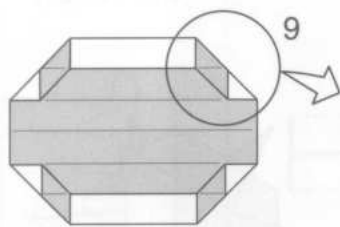
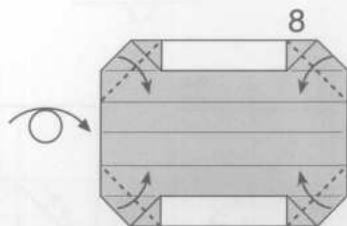
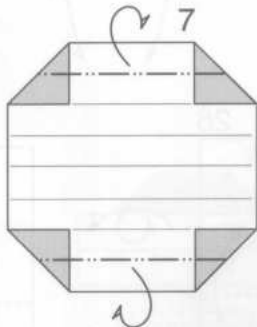
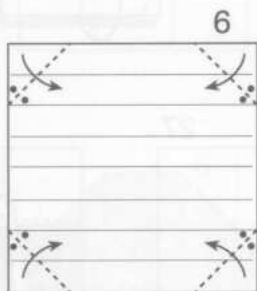
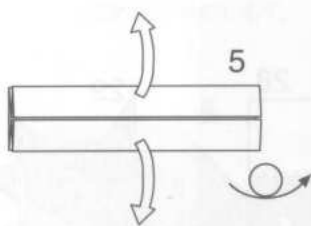
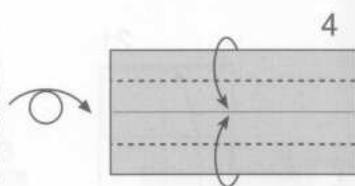
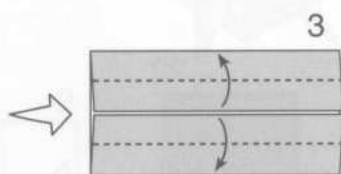
Casket of Hearts



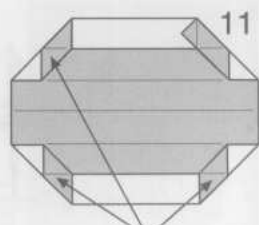
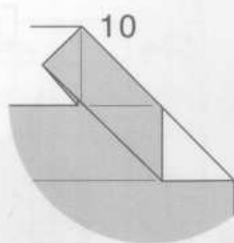
正方形 3 枚



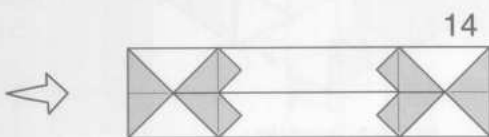
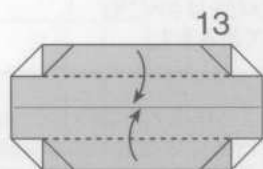
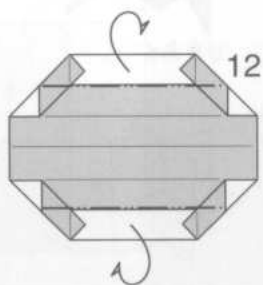
172 号の「方向指示賽」の
バリエーション作品のひと
つです。

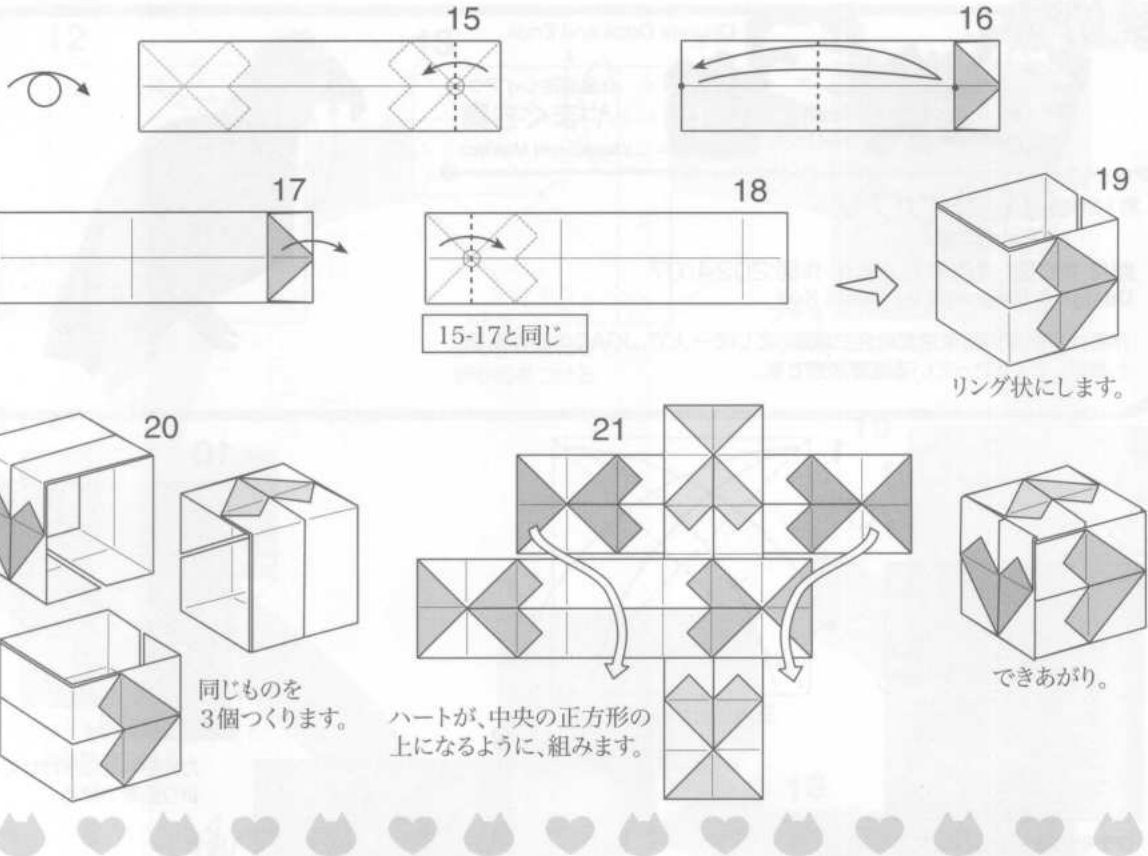


カドを引きだします。



9-10と同じ





ハートが、中央の正方形の上になるように、組みます。

同じものを3個つくります。

できあがり。

折り紙の
周辺

第126回
アカボシゴマダラ
A Red Ring Skirt

Origami and
Its Neighbors

布施知子 Fuse Tomoko

「大地の芸術祭」の搬入が終わり、RMIT大学での展示と8OSMEとFolding Australiaが終わり、今は9月13日～11月4日開催「北アルプス国際芸術祭2024」の準備をしている(このマガジンがお手元に届く頃には開幕しているだろう)。展示物はほぼ制作が終わり、作品を立たせるための構造物や作品を収納する箱などを作っている。ダンボールや厚紙やプラダンが部屋に散乱して、折り紙をしているとは思えない景色だ。

大きい作品はノリを使わずに縫ってつないだ。木綿糸と麻糸を使った。このとき針の穴に糸を通すのに苦労した。糸通しセットを買ってきたが、老眼に乱視が加わり道具を使ってもモタモタした。50代まではスラスラできたのに。

北アルプスのインスタレーションは新作です。お時間のある方はぜひおいでください。とはいうものの交通は不便ですから、ネットなどで検索してご覧いただけたらと思います。

望んでいたことだし展覧会の声が掛かるのは嬉しい。しかし金銭的には十分といえない。発表することに意味があり収入面は考えないできたが、このままではいけないと思う。今後作品展示や販売で活計を立てることを考える人たちは、発表の仕方や売り方の交渉も必須だろう。折り紙に限らず、芸術で糊口を凌いでいくのは一

筋縄ではいかない。
見慣れないチョウが飛んできた。白い羽の下部に赤い点々がある綺麗なチョウだ。写真を撮って調べたらアカボシゴマダラとわかった。特定外来生物に指定されている。迷ったが大町市の山岳博物館に写真を送った。すると県内では次々報告されているが大町ではまだ確認されていないので、と学芸員が幼虫の食草のエノキを調べに來られた。家の裏はクマが出没して散歩コースから外しているのでもちらには行かず、道路脇のエノキに案内した。食痕は見つからなかったが、また調査に来るとお帰りになった。

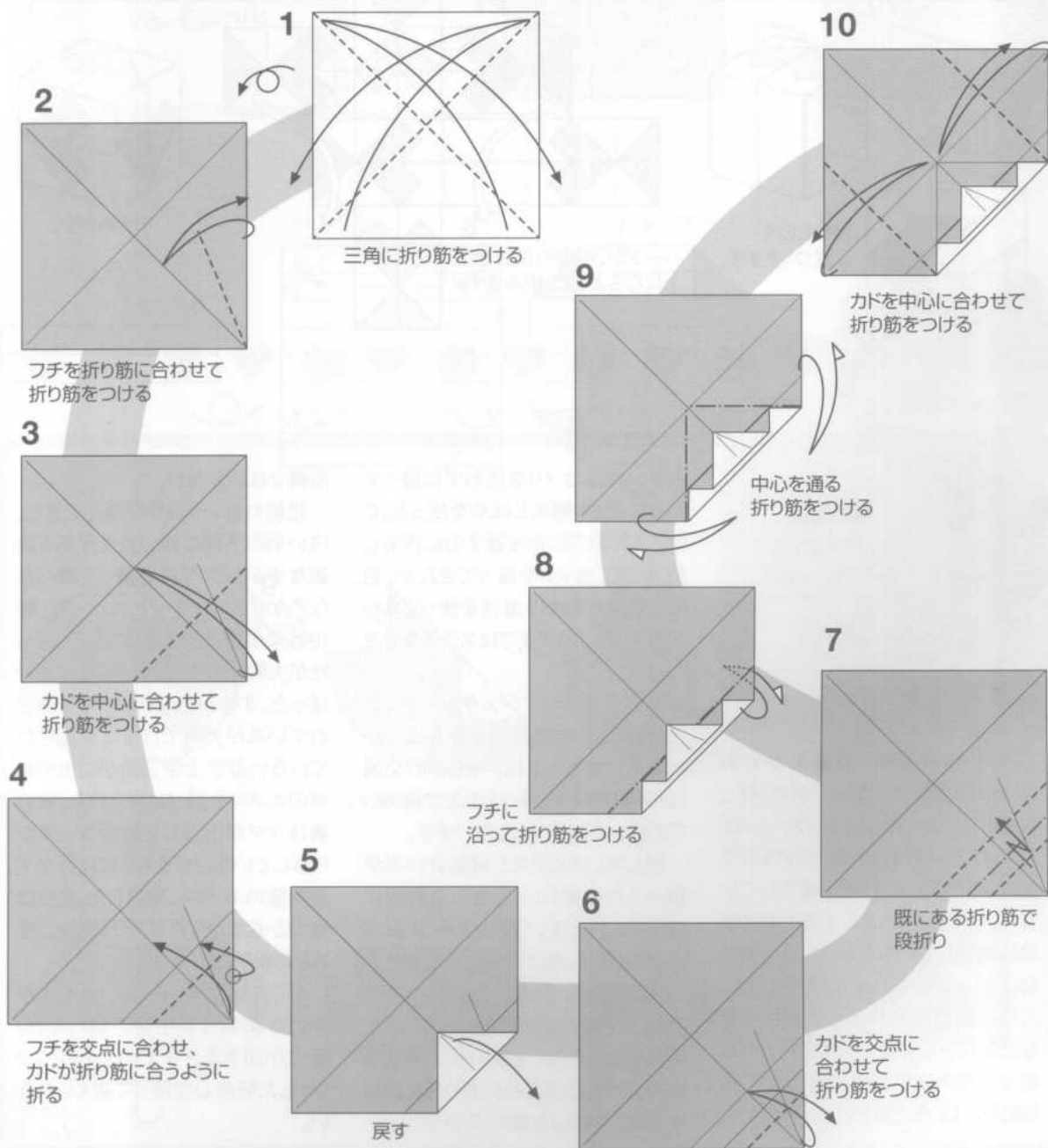
ごく普通に見かけていたものが稀になり、新しい生物が現れる。温暖化が頭をよぎり、この変化をワクワクした好奇心を持って迎えられない。



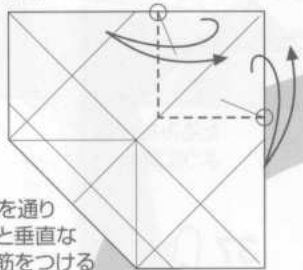
第126回 ハクトウワシ
Bald Eagle

創作・折り図: 大内康治 創作・作図: 2024/07
Design & Diagrams by Ouchi Koji

作者は折紙探偵団東京友の会で活躍している一人で、JOASの図書整理にも貢献してくださっている貴重な方です。

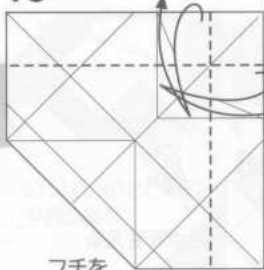


12



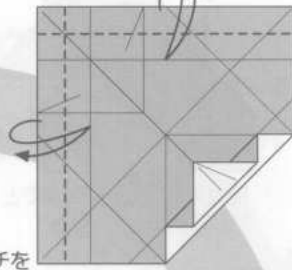
交点を通り
フチと垂直な
折り筋をつける

13



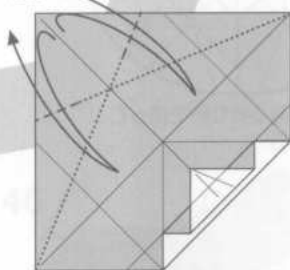
フチを
折り筋に合わせて
折り筋をつける

14



フチを
折り筋に合わせて
折り筋をつける

11



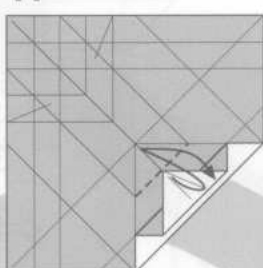
フチを折り筋に合わせて
折り筋をつける

15



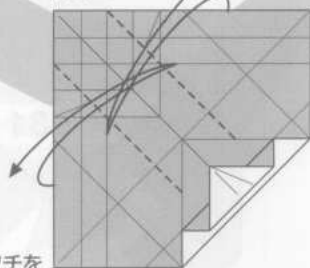
折り筋同士を合わせて
折り筋をつける

17



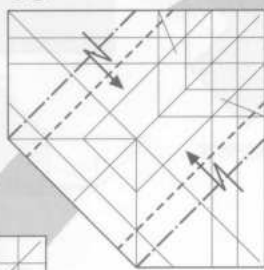
2点をむすぶ線で
折り筋をつける

16



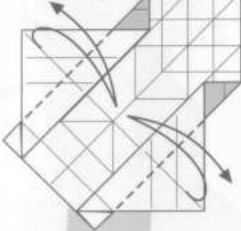
フチを
折り筋に合わせて
折り筋をつける

18



段折り

19



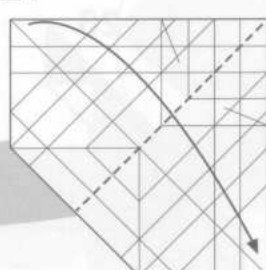
フチに沿って
折り筋をつける

20



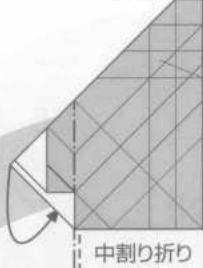
戻す

21



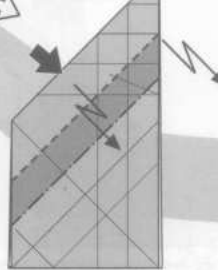
半分に折る

22

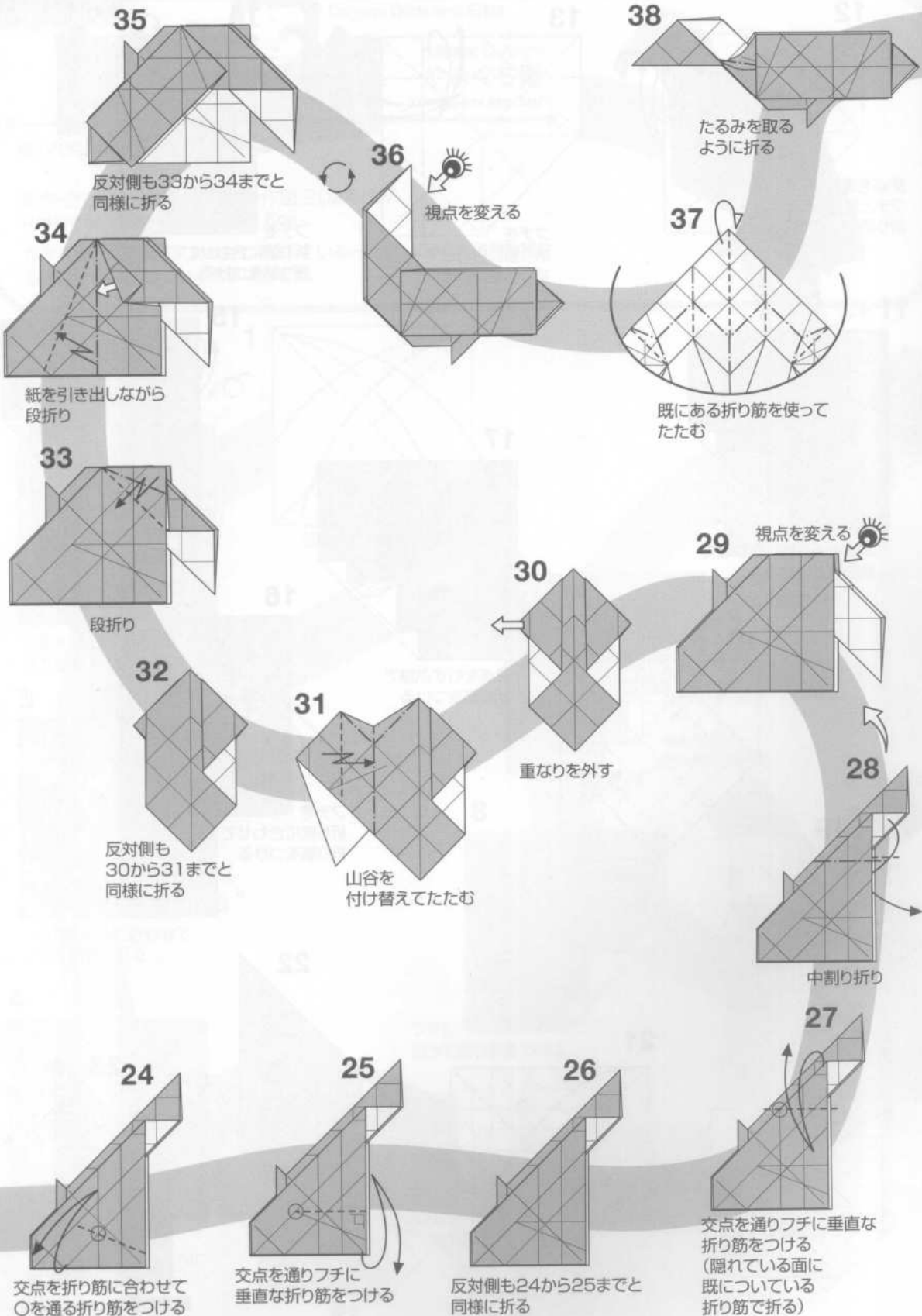


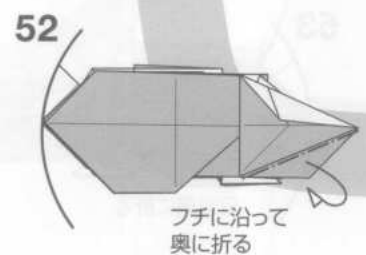
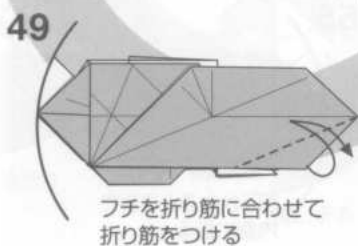
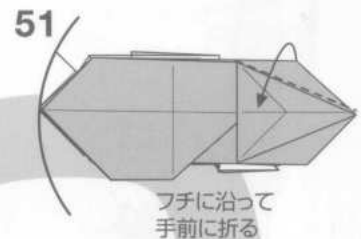
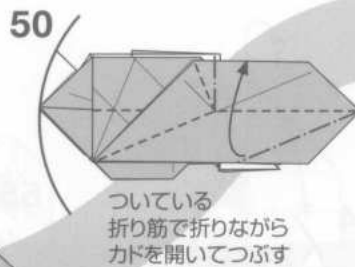
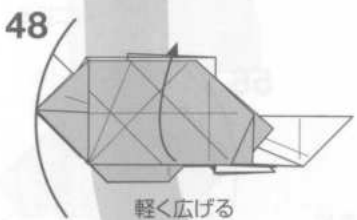
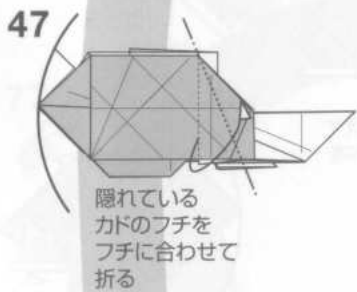
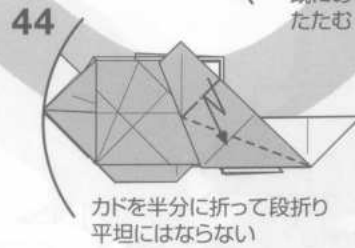
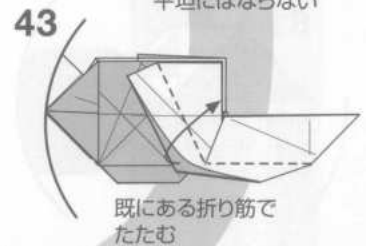
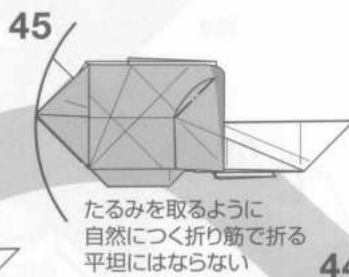
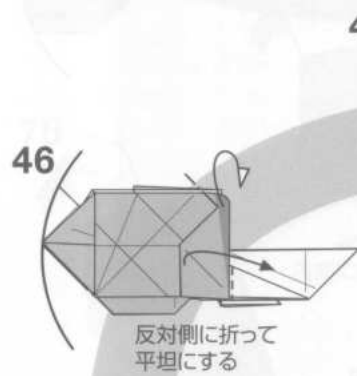
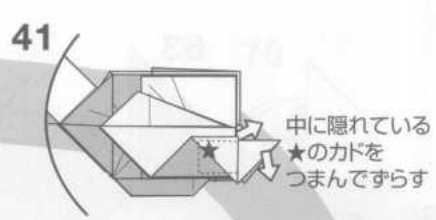
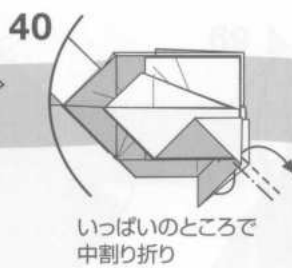
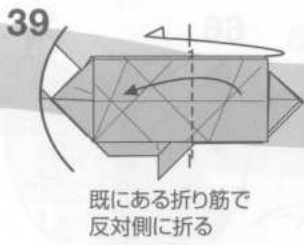
中割り折り

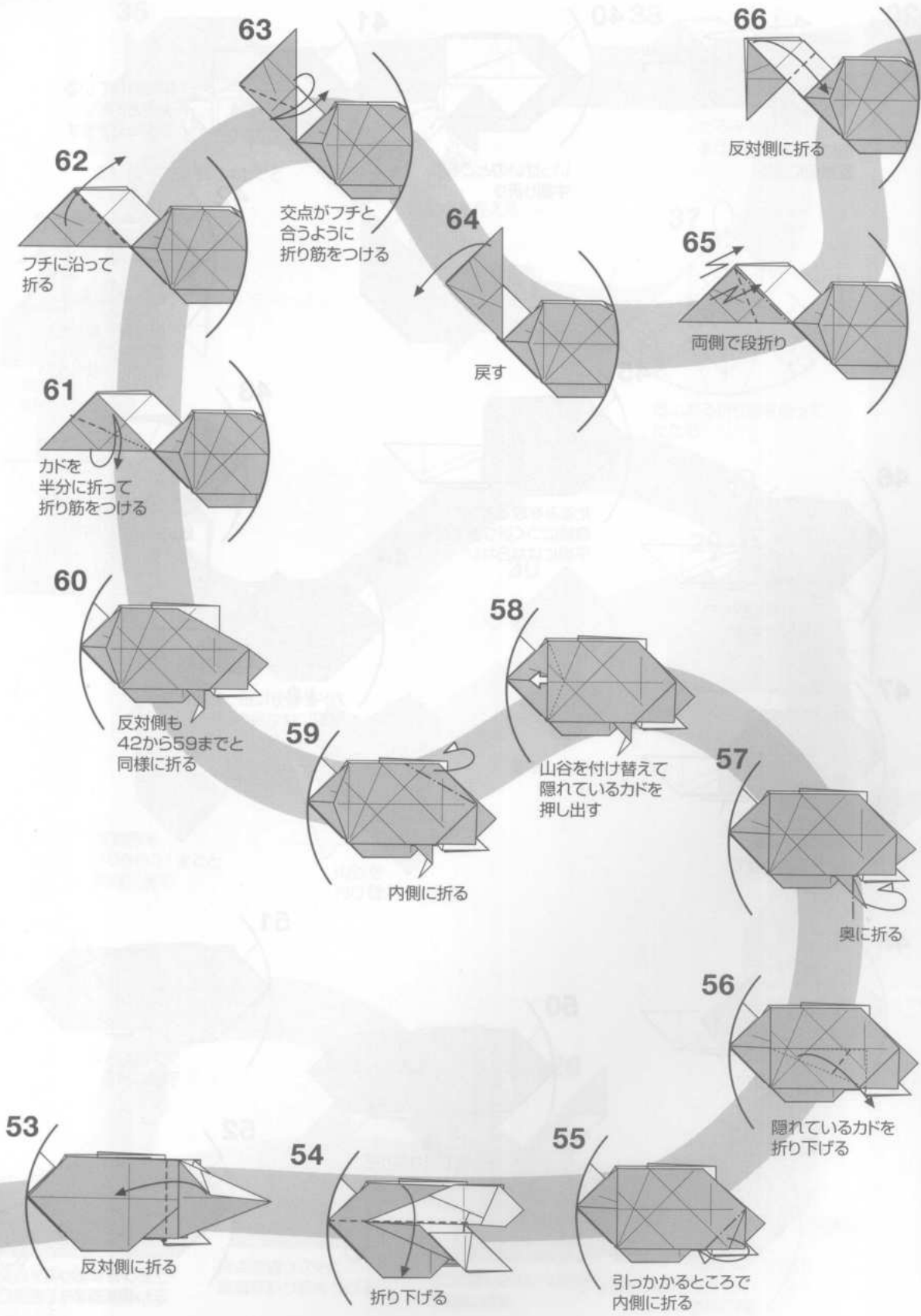
23

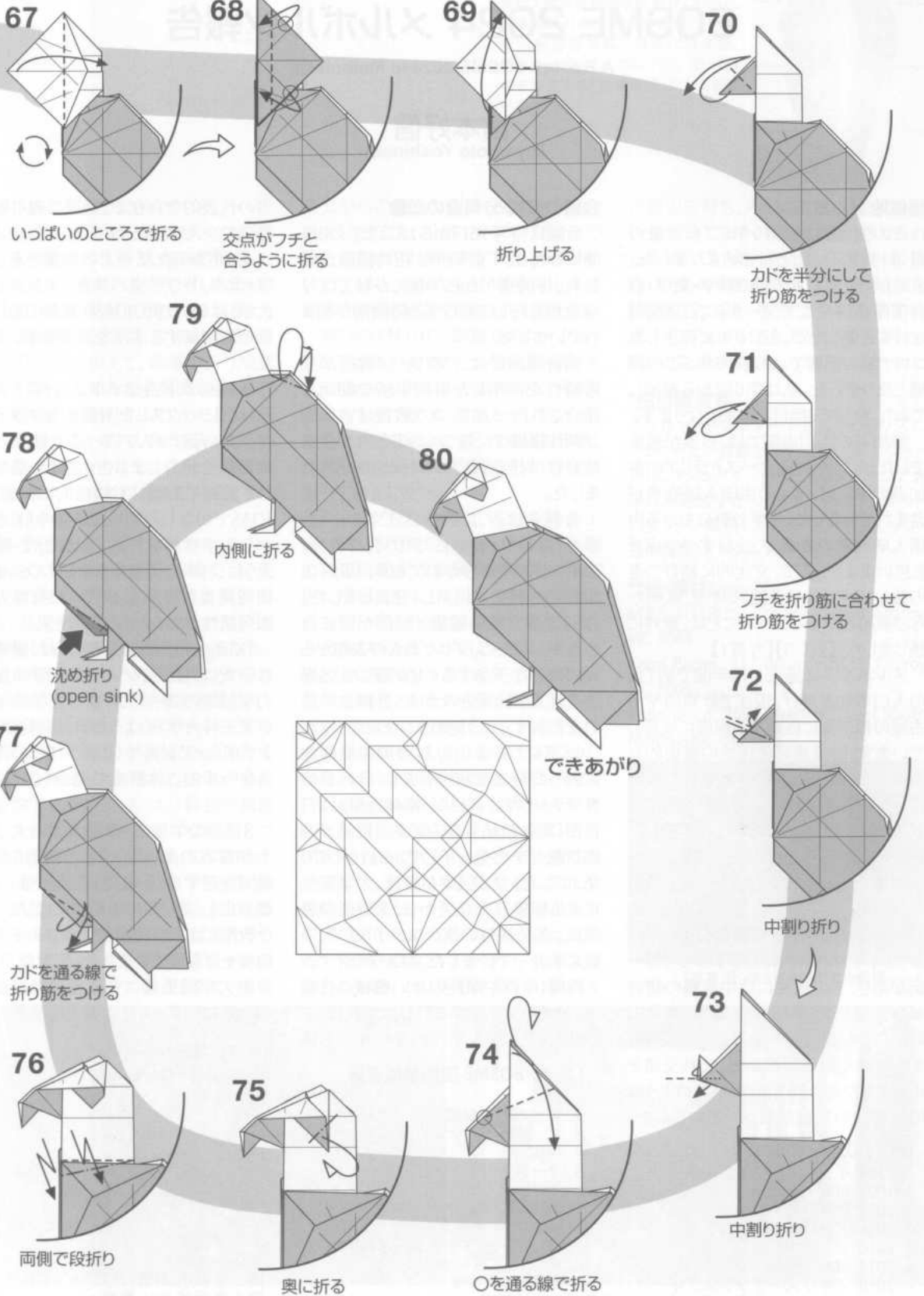


段沈め折り(open sink)









8OSME 2024 メルボルン報告

A Report: 8OSME 2024 in Melbourne

宮本好信

Miyamoto Yoshinobu

開催地:メルボルン

この会議は、1989年に「折り紙の科学・技術会議」として始まりました。2001年以降は「折り紙の科学・数学・教育国際会議」として、4～5年ごとに開催されてきましたが、2019年に発生したコロナ禍の影響で、今回は6年ぶりの開催となりました。私は第6回から参加しており、今回で3回目の参加となります。

参加者の国別内訳では、日本が最多でしたが、アメリカとオーストラリアの参加者の中には、多くの中国人研究者が含まれていました。工学分野における中国人研究者の躍進は、注目すべき点だと思います。一方で、文化的に結びつきの強いイギリスや英連邦諸国、欧州からの参加者が少なかったことは、意外に感じました。【表1-3】【写真1】

メルボルンは過去100年間で約7倍の人口増加を遂げ、現在では福岡や名古屋の都市圏に匹敵する規模に成長しています。旧英連邦植民地の歴史的な街並みは、鋳鉄の飾りが施された玄関ポーチなどが特徴的で、インドや東南アジアからの移民が経営する商店やレストランが街に活気を与えています。

会場となったスウィンバーン工科大学は、市街中心部から電車で15分、約7kmの距離にある住宅街に位置しています。キャンパス内にはグレンフェリー駅があり、その周囲には中高層の建物が高密度に配置されています。真冬の時期にもかかわらず、キャンパスに隣接する公園や緑地は豊かで、公共交通を中心とした都市計画のお手本のような田園都市の景観が広がっていました。

【表1】OSME 開催地

1. 1989 イタリア・フェラーラ
2. 1994 日本・大津
3. 2001 アメリカ・アシロマー
4. 2006 アメリカ・バサデナ
5. 2010 シンガポール
6. 2014 日本・東京
7. 2018 イギリス・オックスフォード
8. 2024 オーストラリア・メルボルン

会議の概観・分科会の印象

会議は、7月16日から18日までの3日間にわたり、午前前半に招待講演が行われ、午前後半から午後にかけては分科会が並行して進行する時間割が組まれていました。

招待講演では、パウリーノ教授が変形特性を活用した研究手法を動画で紹介された一方で、ユウ教授は古典的な剛体機構学に基づく段階的な手法を紹介し、対照的なアプローチが示されました。

分科会は、「工学1」、「工学2」、「数学・計算科学・歴史」、「デザイン・教育」の4つの部門に分かれており、私は「工学1」の分科会に出席し、発表しました。今回は論文集の編集と配信が間に合わなかったため、プログラムの表題から発表内容を予測することが難しく、各発表を注意深く聴きながら、分科会の流れを把握するよう努めました。

以下に「工学1」分科会の中で印象に残った発表を紹介します。分科会のサブテーマは、初日が「剛体折紙」、2日目が「剛体折紙」「厚みのある折紙」「曲線折紙」「その他」、そして3日目が「切り紙」でした。発表スタイルは、大学院生による棒読みの発表から、大御所の先生による完成度の高いスライドまで、多岐にわたっていました。コンプライアント機構(摩擦や摩耗のない機械の仕組み)の第一人者であるハウエル教授(プリガム・ヤング大学)は、その中でも後

【表2】8OSME 国別参加者数

1. 日本	50
2. アメリカ合衆国	40
3. オーストラリア	25
4. 中国	18
5. オーストリア	6
6. イギリス	4
7. エストニア、フィンランド、ドイツ、ポルトガル	3
11. ベルギー、ブラジル、カナダ	2
14. インド、ニュージーランド	1
韓国、オランダ	1
18. 国名未記載	1

者の代表的な存在で、豊富な実用例の動画を交えて紹介していました。

インドからただ一人の参加であったファニスリ・プラタパ先生(インド工科大学)はミウラ折りの板状素材の曲げと延びを制御する手法を発表していました。

米国の高校生、マルコム・スミスさんは、リラックスした対話的なスタイルで「びゅんびゅんバネ」的な機構とその作例を紹介しました。彼は会議を通じて質問や討論にも積極的に参加し、JOASでおなじみのMIT出身のJ.K.さんから入学推薦を打診されました。彼のように、日本の高校生も次回のOSMEで研究発表を行えば、MITへの推薦入学の可能性もあるかもしれません。

「Kirigami」関連の発表には、機構的な研究以外にも、ソフトマテリアル化学力学分野のユーハン・フー先生(ジョージア工科大学)のような素材開発や、シンメイ・シアン先生(広州大学)の分子スケールの立体構造の発表もありました。

3日目の午後に、東南大学の大学院生が厚みのあるミウラ折り構造を切り紙で実現するという発表を行いました。偶然にも、同じ日の午前中にはソーン・ユウ教授による招待講演で同じテーマが取り上げられていました。残念ながら、その大学院生はユウ教授の講演に参加しておらず、両者の発表を比較し討

【表3】基本データ

基調講演者 6名^{*}、参加者 162名、17カ国発表 139件:

- ・工学 69件
 - ・数学、計算、歴史 34件
 - ・デザイン、教育 36件
- ポスター発表 7件、展示 17件
要旨 191件、論文 127件

論文集

- 第1巻 工学1
- 第2巻 工学2
- 第3巻 数学、計算、歴史、メンタルヘルス
- 第4巻 デザイン、教育

○宮本好信(みやもと・よしのぶ) = 愛知工業大学 建築学科 教授(2008-)、日建設計(1986-2008:中国銀行上海、所沢航空記念館、日本化学会館、東京ミッドタウン・ガレリア)。折・曲・切を統合する「拡張折紙」による建築を構想。



議する機会が持てませんでした。

総括すると、工学分野においては、切り込みの積極的な導入、厚みの解消、ヒンジの工夫、素材の開発など、実用・応用に向けた研究が広がりつつあるようです。機構的な面では、従来の平坦折りや平坦可展に加えて、非平坦折りや非平坦可展も含めた総合的な活用を目指す研究が印象的でした。このように研究が進展する一方で、折り紙の文化的背景やその広がりについて十分に理解していない研究者が増えているようにも感じられました。

催事・文化交流

オーストラリアの公的行事では、先住民文化に対する敬意を表す制度があり、会議初日の夕刻に行われた歓迎会でも伝統音楽の演奏がありました。公式晩餐会は、学外の芸術センターにある豪華な宴会場で開催されました。この芸術センターは、旧ホーゾン市庁舎(1890年竣工)を改装したものです【写真2】。晩餐会は円卓に10名が自由に着席する形式で、私は分科会でお会いした汕頭大学のイン・ユウ教授とご一緒しました。ユウ先生は、工学部の土木・知能建設専攻で計算力学や展開構造を研究されていますが、もともとは造園を学ぶ目的で土木科を選ばれたそうです。理数系よりも日本のアニメや美術に熱心な息子を持つ母親として、美術

系大学への進路に関する助言を求められました。また、折紙工学の研究者について、日本では機械系学科出身者が多いのに対し、中国では土木学科出身者が多いという話題にも触られました。

翌日の7月19日、副議長のマイケル・アシスさんの案内で、十数名の参加者とともにメルボルンの画材および紙製品のショップ巡りに参加しました。訪れたのは次の3店舗で、どのお店も洋紙、和紙(阿波紙)、千代紙などが豊富に揃っていました**。

ショップ巡りの際に、高校生のシエン・ユウ君と知り合いました。彼は上海の華東師範大学附属高校の欧米進学組に所属しており、課外指導員の常文武先生と共に会議に参加していました。その後、午後はユウ君と一緒に中央市場と国立美術館を訪れ、夕方にはRMIT大学で開催された布施知子さんたちの展示・講演会に行きました。

会議に続いて、同じ会場で7月20日から21日に開催されたコンベンション「Folding Australia」にも参加し、充実した一週間を過ごしました。この期間中はAirbnbで民泊し、徒歩で会場に通いました。発表に関連して展示した立体構造模型は、平坦な部品を弁当箱サイズのケースに収めて持ち込み、宿泊先で展開・組み立てを行い、会場まで運びました。この住宅は築100年以上

の歴史を持ち、内外装や庭の手入れが行き届いており、歴史の趣が感じられる素晴らしい場所でした。そこでは、拙作「RES」の撮影も行うことができました【写真3】。また、陽気で親しみやすい家主のジェーンさんとの会話も楽しい思い出となりました。

*招待講演者

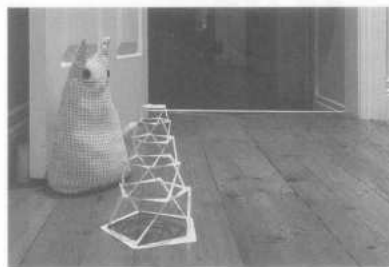
ダリル・ベッドフォードさん(イギリス)、ヤン・チェン教授(天津大学)、デイヴィッド・エプシュタイン教授(カリフォルニア大学)、布施知子さん(日本)、グラウシオ・H・パウリーノ教授(プリンストン大学)、ゾン・ユウ教授(オックスフォード大学)

**紙・画材ショップ

M.E.S. FITZROY 409 Gore Street, Fitzroy, VIC 3065

Kami Paper 217 Brunswick St, Fitzroy VIC 3065

Paperpoint 259 Coventry Street South Melbourne, VIC 3205



【写真3】 RES をみるドア止め猫



【写真1】 集合写真 スウィンバーン工科大学 先進技術センター



【写真2】 公式晩餐会 芸術センター(旧ホーゾン市庁舎)

ぼくらは 折紙探偵団

Here We Are, THE ORRIGAMI TANTEIDAN

第72回 第29回折紙探偵団東京コンベンション 並びに韓国、BOSコンベンション報告

Report on the Three Conventions: The 29th Tanteidan,
Korean, and BOS

8月10日、11日と第29回折紙探偵団コンベンションに招待作家として参加しました。招聘して下さった日本折紙学会さま、また山口さん、松浦さんとおりがみはうすの皆さまには、準備段階から次週の韓国滞在まで大変お世話になりました。ありがとうございました。

招聘の話をいただいてから日本人である自分でいいのかという思いもあり、何が期待されているかを考えていました。大会前におりがみはうすを訪ね、山口さんからいろいろな話を聞かせてもらいながら、自分なりに何かを感じ取り、それを活かして活動していくことを期待されているのかなと思いました。

初日、会場である東京大学弥生キャンパスに着くと皆さんが準備に走りまわっていました。拙作ホームズをあしらったトートバッグにグッズを詰める作業を手伝いながら名札を盗み見すると有名な作家の方達でした。自分の講習も持ちながら準備、運営も手伝っていることに驚きました。

特別講演ではフランスで折紙をするに至った経緯や活動内容を主に話し、技術的な話は「分子パズル」について最小限に話すにとどめましたが、創作に興味をもつ子供たちが喜んでくれているのが幸いです。西川さんに「円領域分子法の現実的な活用法だ」と褒めていただき、感激しました。同じく招待作家であるキム・ジンウさんの講演はOrigami Proの絆を感じられる素敵なものでも、一週間後に生で体験することになりました。一つ目のホームズの講習はオンラインとのハイブリッドで行いました。手元に集中しながら教室にも意識するのが難し

かったのですが、無事全員完成することができました。次の講習のフクロウでは、教室が縦長で、後ろのほうの方には見えにく思ったより時間がかかり、木下さんの助け無しでは間に合いませんでした。展示スペースでは複雑ながら洗練された素晴らしい作品群を鑑賞しました。自分の展示と他の展示作品と見比べると色々反省点も浮かび、勉強になります。

懇親会では招待作家特権を行使して、憧れの作家さん達と話をさせてもらいました。折紙対決が夜更けまで繰り広げられるのを想像していましたが、折紙グッズを巡るピング大会で盛り上がる和やかな会でした。参加者は大人の方が中心でしたが皆、子どものように楽しんでいました。次の日は2時間講習のトビネズミがあるので、4枚貼り合わせた紙と、部分的に拡大パーツも準備して挑みました。結果最後の仕上げを残してどうにか形になりました。付き添いの親御さんは複雑系折紙の洗礼を受け、しばらくお子さんに頭が上がらないでしょう!

参加者の方々、どうもありがとうございました。心残りは名前や作品と顔が一致せず挨拶できなかった作家さんが大勢いたことです。次回は一人残らず挨拶させていただきまます。大満足のコンベンションが終わると打ち上げに誘っていただきました。そこにはボランティア、講習と大活躍の作家さん達が充実した顔で集まっていました。今は立派な社会人ですが、折紙少年の頃からの付き合いのことでした。会の最後に山口さんが一人一人を紹介し、激励するのを聞きながらとても温かい

このコーナーでは、折紙に関連した幅広いトピックを探索してご紹介いたします。読者からの疑問、質問、追加の情報も受け付けていますので、お気軽に webman@origami.jp まで電子メールでお寄せください。

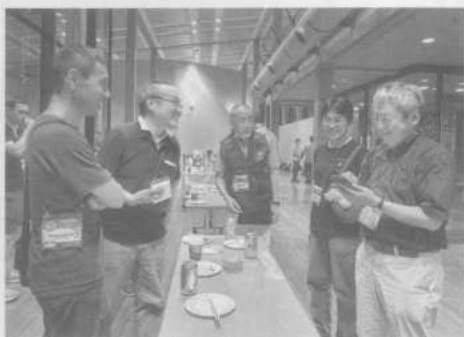
合谷哲哉

Gotani Tetsuya

気持ちになりました。折紙への愛を共有する場を維持するために尽力する人達がいて、今大会を通してその仲間に入れてもらった気がして幸せでした。

翌週にはソウルで開かれた第14回韓国折紙コンベンションにも参加しました。雰囲気は東京コンベンションとは大きく違っており、運営側には女性(編:受付などで動かれているほとんどの方は韓国折紙協会の職員)が多く華やかで、その中にOrigami Proを中心とした元気な若い男性グループがいます。そして参加者は小学生の男の子とそのお母さんが多いようでした。全体が優しいお母さんと格好いいお兄さんと可愛い弟という巨大な家族のような賑やかさでした。しかし、いざ講習が始まるとまるで学習塾のように子供たちはせせせと難しい課題を折っていきます。複雑系作品を義務教育のように習得した子供たちが韓国折紙界の未来を担う姿が見えました。

さらに翌週にはエディンバラで開かれたBOS(イギリス折紙協会)秋コンベンションにも招待作家として参加しました。まず講習作品や展示を見て思ったのが、ユニット折紙の愛好家



▲懇親会で前川淳代表、西川誠司氏、松浦英子氏の各評議員、副会長の山口真氏と和む筆者(左端)



▲ハイブリッド教室で講師を務める筆者

○合谷哲哉(ごうたに・てつや)
=1974年生まれ、大分県出身、フ
ランス在住。折り紙教室、展示や
講演を通して折り紙を現地で広
めている。ここ数年は自身の創
作活動に集中していたが、最近
他の作家さんの作品を折り、学
ぼうという意欲が湧いてきてい
る。代表作に著書『Origamix』が
ある。



が多いということでした。参加者も大
人の女性を中心という印象で、複雑系
の自分は少し場違いな気がしました
が、講習を楽しんでもらい仲間に入れ
た気がしました。

また展示をした方々が自分の作品
を一つ簡単にレビューする時間があり、
交流のきっかけを作る良い企画
でした。同じく招待作家のフランチェ
スコさんのユニット作品の講習を覗くと、
丸テーブルを囲んでおしゃべりし
ながら楽しそうに折っていました。そう
いう雰囲気づくりも大切だと気づきま

した。英語でのやり取りが心配でした
が、プリルさんから「よくやってたよ」と
言われ、安心しました。

こうして3週間にわたる海外(日本
はもはや海外)コンベンションマラソ
ンが終わりました。4月に招待された
MFPPを加えると今年だけで4つのコ
ンベンションに参加しました。どの大
会でもとても温かく迎えていただき
素晴らしい時間を過ごすことができま
した。本当にありがとうございました。
創作者としてはもっと自分の殻を破っ
て、新たな技術と表現を探っていかな
ければと感じました。

韓国での勝田さんと勝崎くんの展
示と講演からは大きな刺激をもらい、
危うく打ちひしがれるところでした。
講師としては、歯ごたえやサプライズ
はありつつ時間内に余裕を持って完
成する作品をもっと作っていきたく
いです。これまでは展示で映える作品作り
を意識し過ぎていた気がします。やっ
ぱりコンベンションは楽しいですね。

一人で本を読んで折ってはいは得
られない体験が満載です。未体験の
方はぜひ勇気を出して参加してみま
しょう! またこのような機会があれば
レポートしたいと思います。

やまぐち真の回想録

マコトか。

Makoto or Not?
Memoirs by Yamaguchi Makoto

折紙探偵団も35年続いています。
長い間、途切れることなく折紙探偵
団マガジンの発行を続けてきました。
その間、売却しきれずに残ってしま
った探偵団マガジン(バックナン
バー)、倉庫も満杯になり、収容しき
れなくなりました。現在、借りている
倉庫も契約の切れる時期が迫って
きています。

廃棄、断裁するのも勿体なく、何
か役立つ方法はないかと考えてみ
ました。その一つの方法として、折紙
探偵団マガジンをまだご存知ない
方々の目にとまるような施設及び団
体へ無料配布するという考えに至り
ました。

■目的

日本折紙学会及び折紙探偵団マ
ガジンの認知向上と購読者数の拡
大を狙い、日本折紙学会の目的の一

第8回

折紙探偵団の普及を願って

In Hopes to Promote Origami Tanteidan

やまぐち真

Yamaguchi Makoto

つである「折り紙の専門研究と折り紙
の普及の促進」につなげていく。

■想定している対象と配布方法

- ・大学図書館及び大学研究室(数学・工
学・造形分野など)
- ・中学、高校、地域の図書館
- ・地方の科学館
- ・その他地方公共団体
- ・高校、大学の折り紙サークル

以上を対象として、バックナンバーを
箱詰めして、着払いで送付いたします。
個人宛は対象外。

このような施設・団体の紹介、調整に
皆様のお力をお借りしたいと考えてい
ます。

内容は、バックナンバーの中から無
作為に選んだ10期~20期分程度を
考えています。送付される期の指定は
できかねますのでご了承下さい。届い
たマガジンの扱いについては、該当施

設・団体の方で有効に使っていただ
ければ自由です。配布先は、学会の
方で選定させていただきます。

■『折紙探偵団マガジン』とは

本誌は、日本折紙学会(<https://origami.jp/>)の発行する機関誌です。
コンプレックス(=複雑な)作品の新
作や季節感あふれる作品の折り図
やカラー写真、専門家による創作法・
歴史などの研究記事、作家インタ
ビュー、エッセイなど、あらゆる角度
で折り紙を楽しみつくす専門誌です。

- ・隔月刊行(奇数月25日発行)
 - ・本文約42ページ/カラーページ8
ページ(35期現在)
 - ・年間購読費4,800円(35期現在)
- 折紙探偵団マガジンについて詳
しくはホームページをご覧ください:
[https://origami.jp/magazine/
about/](https://origami.jp/magazine/about/)

折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

仮屋 寛悟 Kariyazono Kango

97冊目 『おりがみ新世紀』笠原邦彦 著

“Origami, La Era Nueva” by Kasahara Kunihiko

【はじめに】

今回紹介させていただくのは、『おりがみ新世紀』(サンリオ、1989年発売、図1)。折紙愛好家のバイブルと呼び声の高い「ビバ!おりがみシリーズ(図2)」5冊のうち3冊目にあたる書籍である。シリーズ1冊目『ビバ!おりがみ』と2冊目『トップおりがみ』は、折紙探偵団マガジン109号の当コーナー(7冊目)と118号の当コーナー(16冊目)にて、それぞれ小松英夫氏によって紹介されている。当コーナー黎明期に紹介された書籍の続編を、当コーナー97冊目にして若輩者の私が紹介するのはやや恐縮だが、お付き合いいただきたい。

【“折紙新世紀”への道標】

本書が発売されたのは、シリーズ2冊目の『トップおりがみ』が1985年に発売されてから4年後の1989年。当時世間は21世紀を10年後にして期待や不安に色めき立っており、折紙界はそれに先駆け一足早く新世紀を迎えていたことが本書からうかがえる。

まず表紙を見ていただきたい(図1)。私はこの表紙が、狙ってか狙わずしてか、本書が折紙の歴史においてどの位置づけの書籍であったかを物語っていると感じる。表紙を飾るのは本書で紹介されているジョン・モンテロール氏の「わに」。幾何的な設計に対し、立体感、躍動感、質感を与える尾の段折り模様は目を引かれる。そんな「わに」が砂浜の上を生き活きと闊歩し、その砂浜に展開図(新たな潮流)が波のように押し寄せているように見える。今でこそ折紙作品と展開図を並べて描いた書籍の表紙は珍しくないが、むしろ定番のデザインとなっているが、本書の場合「当時にしては新しかった」だけでなく特別な意味を感じ取れる。なぜなら折紙作品

よりもはるかに大きなスペースを使って展開図を載せており、しかもこの展開図は表紙を飾っている「わに」の展開図ではなく、同じく本書にて紹介されている別の作品(前川淳氏の「サイ」)の展開図だからだ。これは『ビバ!おりがみ』から紹介されてきた展開図折りやさまざまな設計理論が認知されたことにより、展開図が折紙作品と切り離され、書籍の表紙を飾るに値する単独の作品として扱われた歴史的一場面のように思えるのである。

また本書冒頭では、著者の笠原氏により本書発売の経緯も綴られている。笠原氏は『トップおりがみ』発売から3年ほど続編の準備をしていたが、国内外の折紙愛好家との交流を経た直近半年までの期間に、本書で紹介したい分量が大きく膨らんだことを経験し、「すでに折紙の新世紀は始まっていた」と感じたという。かくして本書は、当初1冊の予定が2冊分冊として発売されることとなり、シリーズ4冊目の『おりがみ新世界』とともに誕生した(『新世界』は本書と同年1989年発売)。2冊に分冊された名残か、『新世紀』『新世界』には共通の副題「名人達の傑作集」が付けられている。これら2冊は『ビバ!おりがみ』『トップおりがみ』と同様、作品の折り方だけでなく折紙の最前線を学べる読み物という特徴を踏襲したボリューム満点のもので、加えて分冊となってもなお270ページを超える。この勢いこそ、当時笠原氏が感じたという“折紙の新世紀の始まり”を読者に伝えてくれている。

【新世紀生まれから見た本書】

本書は4つの章と1つの付記という構成からなり、それぞれの章で折紙と幾何学との関係や、基本形の使い方、長

この連載では、折紙学会図書館に所蔵されている資料の中から、興味深いものを選んでご紹介しています。折紙図書館の蔵書は、折紙探偵団ホームページから検索できます。詳しくは、<https://origami.jp/Library/>にアクセスしてください。

方形用紙の可能性、そしてモンテロール氏の折紙作品を紹介している。

ところで、私は本書の発売より後年に生まれた“折紙新世紀生まれ”である。私が折紙にハマるころには、折紙は1980年代の折紙新世紀を迎えて20年ほど経っており、はっきり言って折紙と幾何学との関係や、基本形という概念、長方形用紙を用いた作品の魅力などはすでに広く知られている情報であった。しかしそれで知った気になって本書に触れると、それまでの情報は本書のエッセンスを包含した折紙作品を介して享受していたにすぎないことを思い知ることになるだろう。本書は、なんとなく知った気になっていた概念を直接的に学び直すことができるという点で、折紙新世紀生まれの中にも新たな潮流を生み出してくれる可能性がある。

例えば第1章の「華やかな幾何造形」では現実世界の山折りと谷折りを幾何学的にとらえ直し、「折るとはということか」を説明(図3)し、その思想が「名人達の傑作」たる川崎敏和氏のバラ作品や「たとう(畳紙)」シリーズの紹介に至っている。本書で幾何学の視点で論じてきた折紙が、植物などの自然物の表現や、折紙を用いた幾何的な形の美しさの表現に回帰している点が面白い。また、伝承折紙の「パヤリーテ(小鳥)」(編注:スペイン語でパハリータ(pajarita)といいます)や「コップ」がユニット折紙紙に転用される奇天烈な姿を見ることもできる。これらは元となった伝承作品を幾何学の視点により分解してから見ることで、奇天烈な姿としてだけでなく、実に理屈立った作品として味わうことができる。

第2章では「基本形のじょうずな使い方」と題して、「基本形とは」という説明



＜図1＞本書の表紙。折り紙の新たな潮流を感じる

からはじまり、基本形を活用した「名人達の傑作」を紹介している。この章での私のお気に入り、基本形のことを単なる形としてだけでなく、「何か新しい形を作りたい」という願望をかなえるための技法として紹介している点だ。どの作品にどの基本形のどの部分が使われているかなど意識せずに過ごすことも多いが、ふと立ち止まると、改変、改造されつくし、部分的に取り出され実体のなくなった何かの基本形が、確実に我々の折り紙のどこかに潜んでいるこ

とに気付かせてくれる。

第3章では「長方形用紙の大きな可能性」について述べている。例として正方形で折ったカニ(枝分かれのないはさみと1対の脚、そして切り込みにより目玉を出している)を、長方形用紙で再構築することで、切り込みなしで目玉、枝分かれのあるはさみ、そして4対の脚を折り出すことができるという、カニの創作の過程を示している(図4)。笠原氏は本章の冒頭で長方形用紙のことを「望みをかなえてくれる」と表現しているが、言葉のまま長方形が折り紙にとって優れた形であると捉えてはいけな

○仮屋 寛悟(かりやその・かんご) = 鹿児島県出身。1993年生まれ。8月の第29回折紙探偵団コンベンションでは、当コーナーがきっかけでORIGAMI PROのお二人とご挨拶できました(写真中央:筆者、左:キム・ジンウ氏、右:ユ・テヨン氏)。感謝!



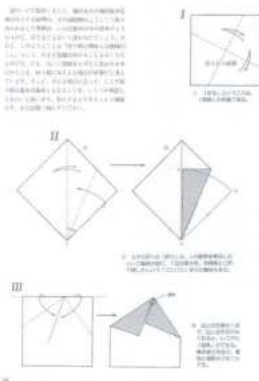
1章で紹介した幾何学的視点や、2章で紹介した基本形という概念を引用すれば、作品にとってそれぞれ適した用紙の形があり、それが正方形になることもあれば、ある縦横比の長方形になることもある、ということ伝えてる。

第4章は、モンテロール氏の作品集となっている。一般の折り紙書籍は作者本人が作品を解説することが多いが、本書の場合はモンテロール氏ではなく著者である笠原氏の解説・評価が楽しめる。同じ折り出しから分岐し個性的な作り分けを行っている哺乳類作品や、特徴を22.5度で描写したサイヤ象、サメ、古生物などの作品は、工程もその仕上がりも含めて魅力的な作品である。笠原氏はモンテロール氏の作品を、前川氏の作品とともに「知的パズルのような作品」と表現し、「これらは知的好奇心を呼び起こしてくれる」と評している。本書の第1～3章(それに加えてシリーズ前作等)に触れ、笠原氏の幾何学的視点や感性の一部を共有できているところには、似た評価にたどり着けるはずだ。自身の作品評価軸のひとつとして吸収することもできるので、読む人によっては温故知新となるだろう。



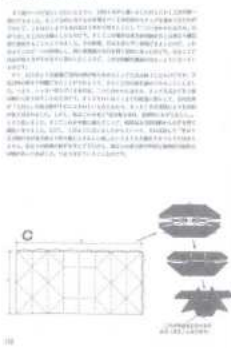
＜図2＞ピパ!おりがみシリーズいずれもインパクトの大きな表紙デザインである

「折る」とはどういうことだろうか?

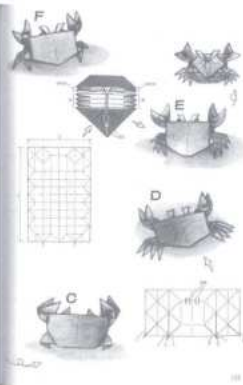


＜図3＞「折る」という行為を幾何学的な視点で説明

工夫の経緯(続き)



＜図4＞カニの創作過程。作品にとって適切な用紙の形を探る



【おわりに】

今回は「ピパ!おりがみシリーズ」の3冊目である『おりがみ新世紀』を紹介させていただいた。折り紙新世紀生まれにとっても、1980年代の折り紙の新たな潮流を感じることができ、自身の折り紙歴に新たな潮流を起してもらえる素晴らしい一冊だ。シリーズ各書とともにぜひ手にお取りいただきたい。あなたが本書に触れたとき、あなたは一枚の紙の中に宇宙を見る(※本書のキャッチコピーを引用)

今号の折り図・展開図掲載作品より 解説：前川 淳 (P.20-21)

Models Based on Diagrams and Crease Patterns of This Issue Comments: Maekawa Jun (P.20-21)

「猫耳キューブ」作：前川淳 (P.4)

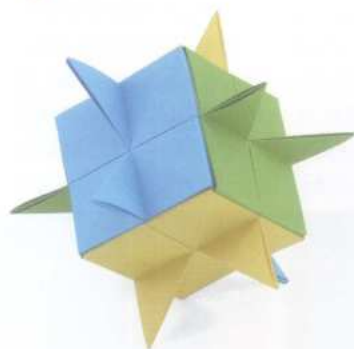
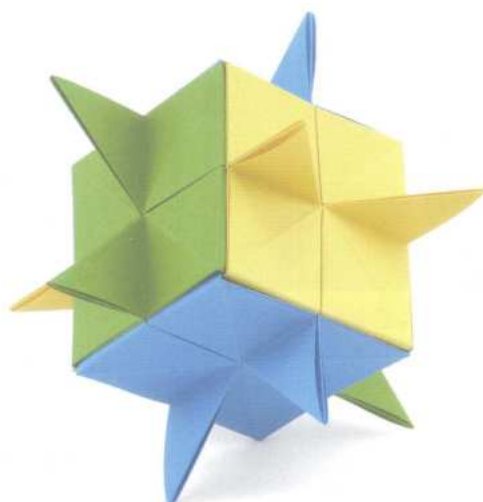
Cat Ear Cube: Maekawa Jun (P.4)

■構造的には、内部にしっかりした骨組みを持つことが特徴となっている。組み合わせ方法も、スリットで「板」を挟むという、あまり類例のないものである。

「ハートの小箱」作：前川淳 (P.6)

Casket of Hearts: Maekawa Jun (P.6)

■172号の「方向指示賽」や176号の「料理選択ダイス」と同様に、3つのパーツで編むように組む。折り変えてほかの模様もできるので、試してみたい。



「ハクトウワシ」作：大内康治 (P.8)

Bald Eagle: Ouchi Koji (P.8)

■頭部が白いことを特徴とする、アメリカ合衆国の国鳥が、すっきりと造形されている。最後に近い工程で無理なく現れるすどい眼が、効果的な「画竜点睛」となっている。



「和牛」作：小松英夫(P.27)

Wagyu Bull: Komatsu Hideo (P.27)

■どっしりとした身体と細い脚の牛が、作者の特徴である「ぐらい折り」のない構造と工程でみごとに表現されている。胴の立体化や、頭部、胸部、腹部、尾などの細部もしっかりと決まって、余すところがない。



「ねずみ(立ち姿)」作：霞誠志(P.39)

Mouse (Standing): Kasumi Seishi (P.39)

■折り目の角度が、基本的には、30度の倍数である30度、60度、90度となっているのが特徴的だ。それらの折り目がうまく正方形の中に配置され、ねずみのプロポーションに適合している。



第29回折紙探偵団コンベンションより

From the 29th Origami Tanteidan Convention



▲コンベンション会場の東京大学弥生講堂



韓国からのスペシャルゲスト ORIGAMI PROのリーダー、キム・ジンウ氏(左)



フランス在住20年を越すアコーディオン奏者でもある今年のもう一人のスペシャルゲスト合谷哲哉氏



前川淳評議員代表の開会宣言



懇親会

◀本誌「折紙図書館の本棚から」を担当している飯屋園寛悟氏の担当で好評だったビンゴゲーム

▶料理を前に和む会は好評のうちに進められた



古くからのJOASメンバーも会話で花が咲いたようだ



▶折紙探偵団コンベンション常連のORIGAMI PROSメンバーも楽しんでいた
右からユテヨン、チャンヨンイク、キムジンウ、キムドンヒョンの各氏



西川誠司評議員の進行挨拶



山口真副会長の誕生日ということで花束が贈られた



韓国からの参加者
左から日本大好きなイム・ソンジャ氏
韓国折紙協会会長のチュ・アンナ氏
副会長のパク・インソク氏



事務局長の野口マルシオ氏(右)と歓談する合谷氏(左)



マガジン常連折り図執筆者の萩原元氏(左)と満田茂氏(右)



関西友の会の袋井一樹氏(左)と勝崎友太氏(右)

▶東海友の会で頑張っている中村康佑氏(左)とコンフレックスフォルダーのアイドル神谷哲史氏(右)





満田氏の講習はハイブリッドで、Zoomでも受けられた



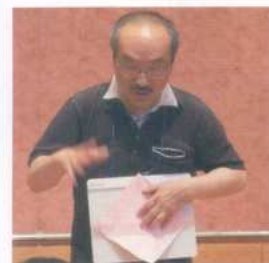
スペシャルゲストの合谷哲哉氏



韓国のコンベンションにスペシャルゲストとして招待された勝崎友太氏



マイマイこと今井雄大氏



JOAS代表の前川淳氏

折り紙教室

折り紙教室は2日間で全部で50教室が用意され参加者の皆さんに楽しんでいただいた

▶ズーム配信も好評で予想より多くの方に参加していただいたご参加いただいた皆様ありがとうございます

◀東海友の会で中心的な役割をこなす亀井浩平氏(右)



チャン・ヨンイク氏



スペシャルゲストのキム・ジンウ氏



Zoom教室を担当した中村康佑氏



「折紙がつなく芸術・科学・産業」のスペシャルゲスト エカテリーナ・ルカシェヴァ氏



魚のモデルが得意な各務均氏



図書の整理も手伝ってくれるようになった平原祐輔氏



コンベンション準備段階で手伝っていただいた松田景吾氏



韓国語の通訳を引き受けてくれたユ・テヨン氏

第29回折紙探偵団コンベンション展示作品

Models Exhibited in the 29th Origami Tanteidan Convention



展示会場



豊村高志
ツタンカーメン王 黄金のマスク



増田恵也 / ガンダ○



平原祐輔 / ヨロイトカゲ



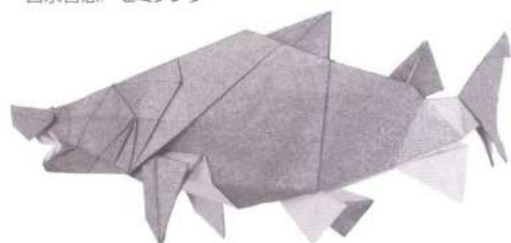
合谷哲哉 / サイ



宮永智悠 / セミクジラ



合谷哲哉 / 伝説の獣



中村楓 / シロワニ



今井雄大 / トリケラトプス



佐原広樹 / 狛犬



ユ・テヨン / お茶を飲むカバ



満田茂 / ヤドカリとヤシの木



神谷哲史 / ディアブロ



キム・ジンウ / ショベルカー



勝田恭平 / キマイラ



キム・ジンウ / 二枚貝と魚



マシュー・ウォン / 子ブタ



キム・ドンヒョン / 干物



比留間将斗 / 標本箱



佐藤悠樹 / コウモリ



萩原元 / 鶴の巣ごもり



霞誠志 / 阿吽の虎



エカテリーナ・ルカシェヴァ

創作折り紙人気投票
Origami Model
Popularity Contest

「E」
1位
Zodiac "Snake"
1st



佐藤悠樹 / ソウを飲み込んだウワバミ



「E」
2位
Zodiac "Snake"
2nd



浅野 聖 / コブラの胸像

「E」
3位
Zodiac "Snake"
3rd



中村 楓 / ニシキヘビ

第14回韓国折紙コンベンションより

From the 14th KOREA Origami Convention



ORIGAMI PROのメンバー紹介
もう一人のメンバーのパク・ジョンウ氏は仕事の都合で遅れて参加した



新しいORIGAMI PROの表紙



ORIGAMI PROのメンバーによるサイン会



ORIGAMI PROのメンバーの展示コーナー

展示作品

ORIGAMI PROの
展示作品の紹介です



会場の展示風景



作者作品名を入れずに
紹介しました。
全てORIGAMI PROに
折り図とともに紹介されて
います。



韓国コンベンション スペシャルゲストの
勝田恭平、勝崎友太の各氏



勝田、勝崎各氏の展示コーナー



OrigamiATCはやはり女性の世界？
OrigamiATC交換会はすっかり根付いて活動が続いている

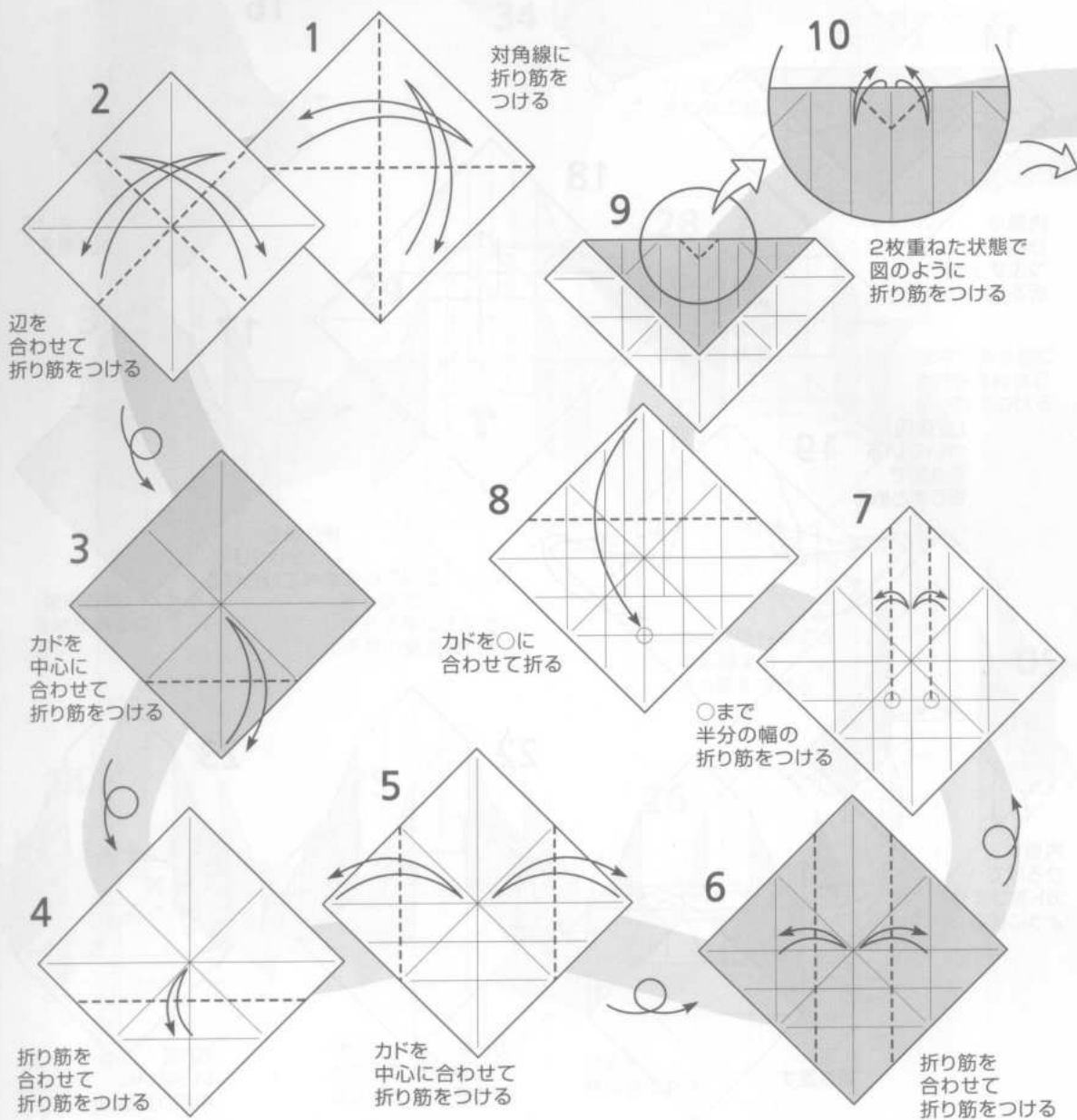
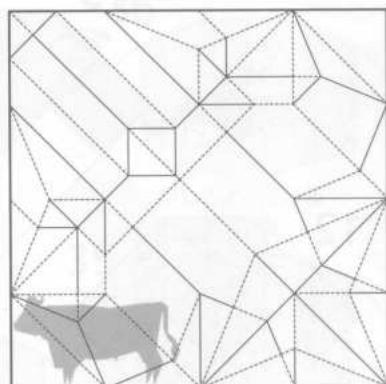
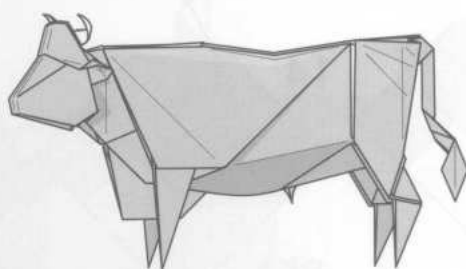
和牛

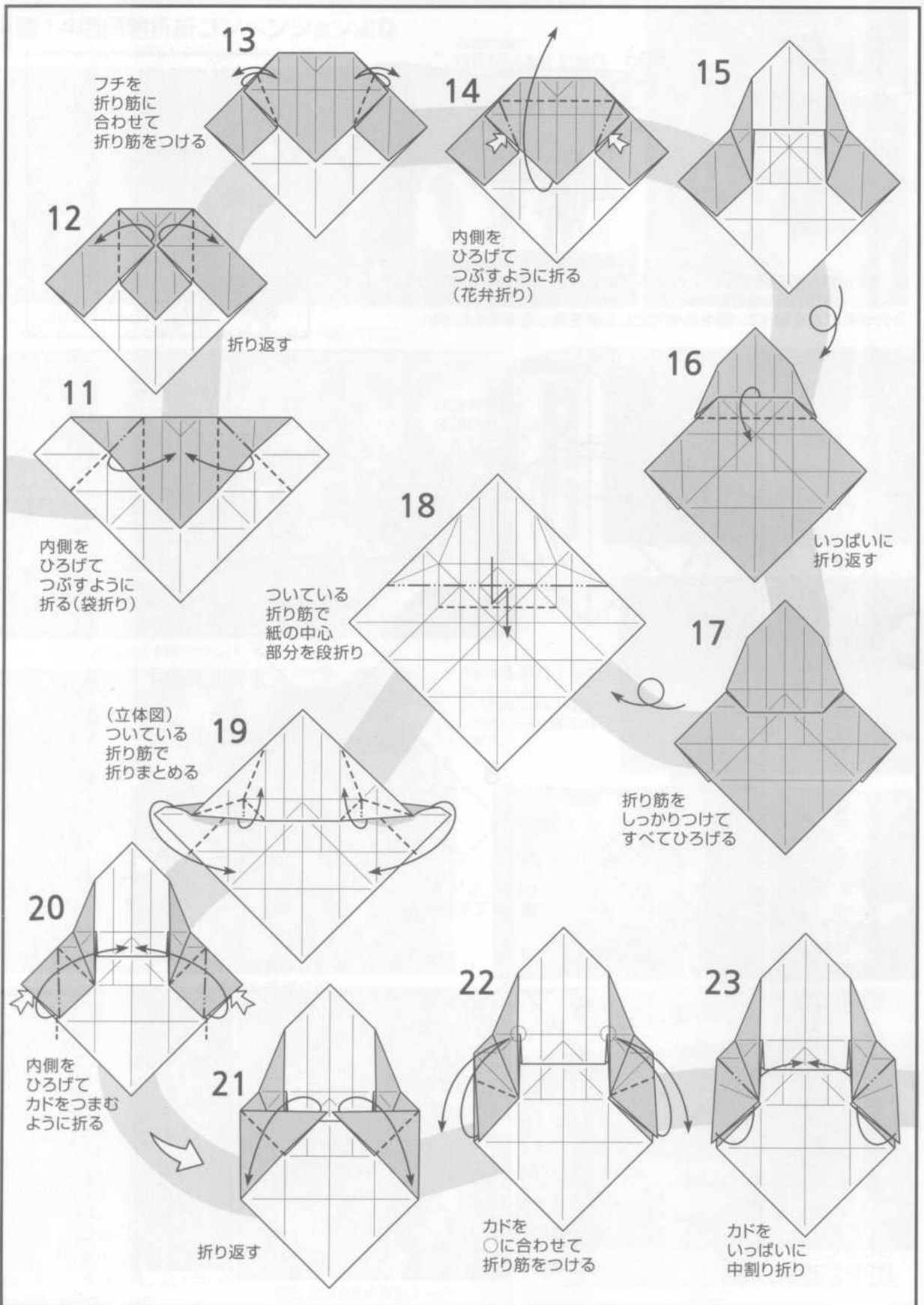
Wagyu Bull

小松英夫
Komatsu Hideo

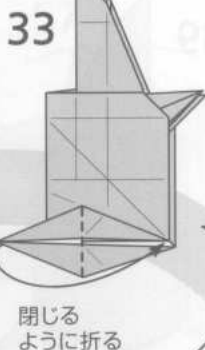
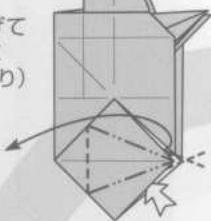
2020年創作

15cm折り紙用紙では仕上げが不完全になると思われ、おすすめしません。折り紙用紙の場合は35cm四方を推奨します。できればしっかりした大きめの紙を使って、雄牛の堂々とした姿を作ってみてください。



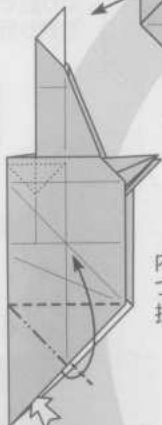


32
内側をひろげて
つぶすように
折る(花弁折り)



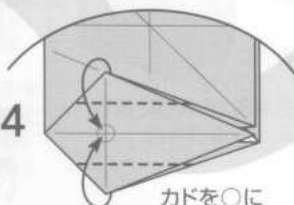
33
閉じる
ように折る

31



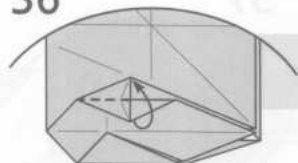
内側をひろげて
つぶすように
折る(袋折り)

34



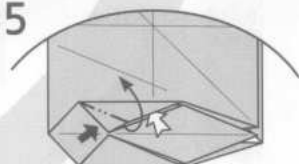
カドを○に
合わせて折る

36



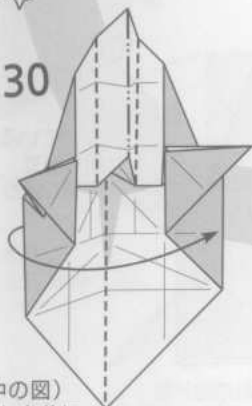
閉じるように折る

35



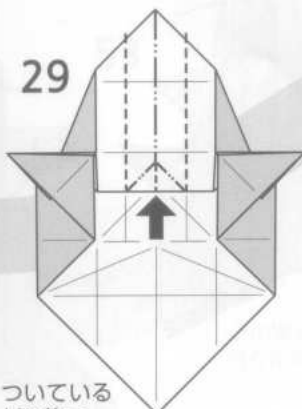
すき間をひろげて
つぶすように折る

30



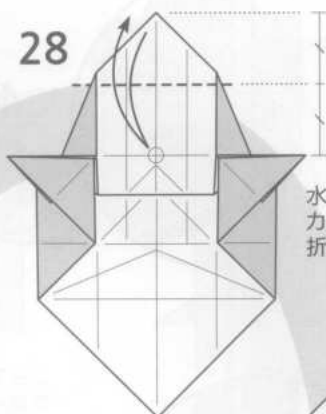
(途中の図)
全体を半分に
折る

29



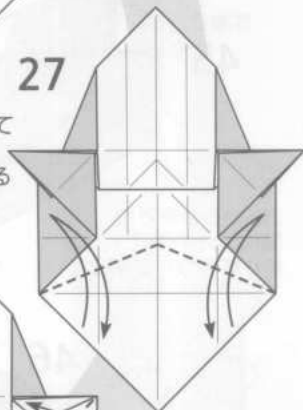
ついている
折り筋で
フチを押し込んで
手前の紙を段に折る

28



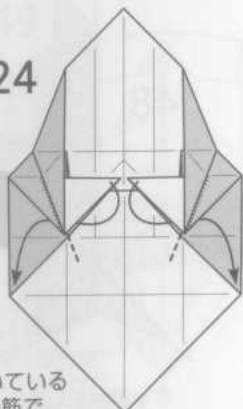
水平の折り筋に
カドを合わせて
折り筋をつける

27



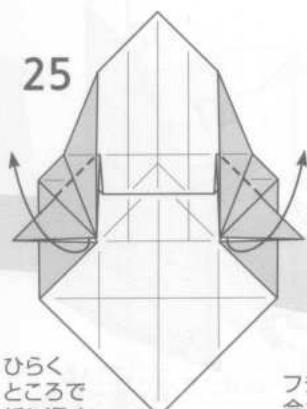
フチを合わせて
中心線まで
折り筋をつける

24



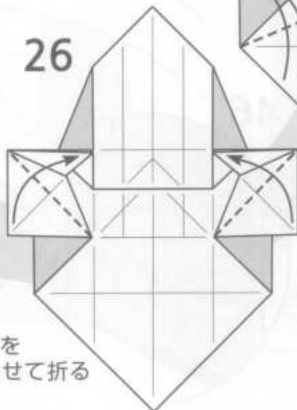
ついている
折り筋で
カドを中割り折り

25



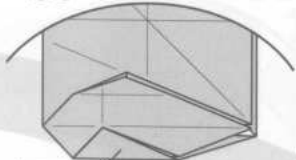
ひらく
ところで
折り返す

26



フチを
合わせて折る

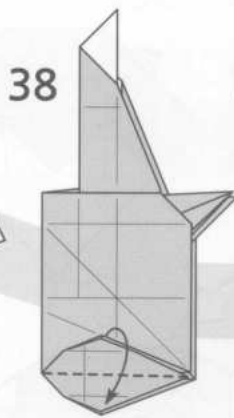
37



35-36

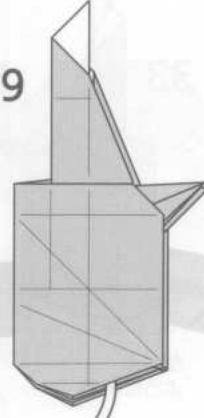
下側も35~36と同様に折る

38



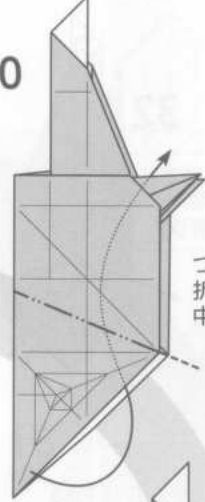
閉じるように折る

39



折り筋をつけて
いったん戻す

40



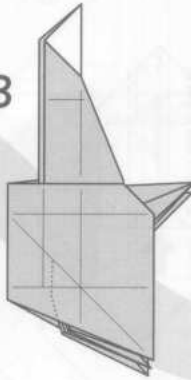
ついている
折り筋で
中割り折り

44

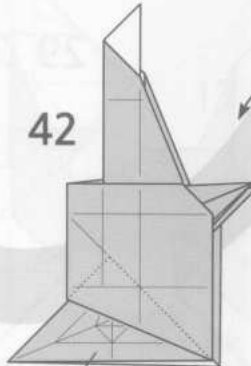
◎のところから
○同士を
合わせる
ように折る

こちらの○は
カドではない
ので注意

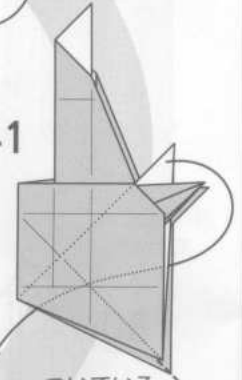
43



42



41



ついている
折り筋で
中割り折り

45

カドから◎までの
間に、しっかりと
折り筋をつけて戻す

「30°」の
折り筋です

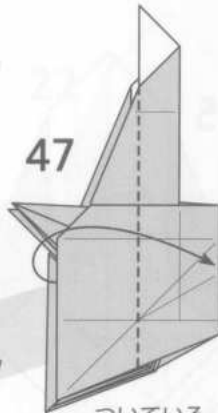
31-38

内側のカドを
39の形まで戻す

46

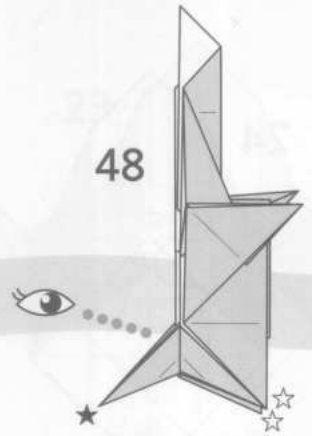
図の部分に
折り筋を
つけ直す

47



ついている
折り筋で折る。
向こう側も同じ

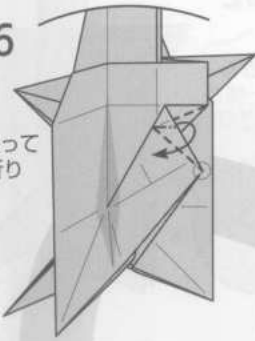
48



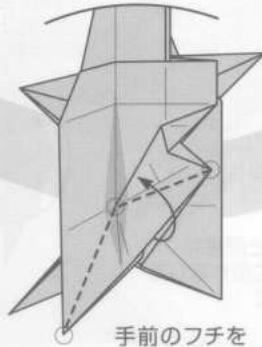
半開きにして
左から見る

56

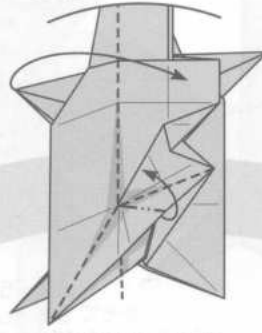
つけた
折り筋を使って
引き寄せ折り



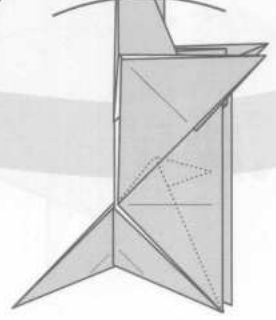
57



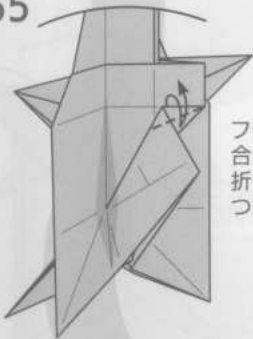
58



59



55

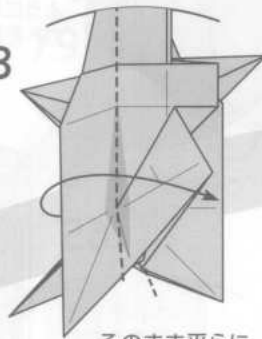


フチを
合わせて
折り筋を
つける

手前のフチを
○を結ぶ線で
持ち上げる
ように折る

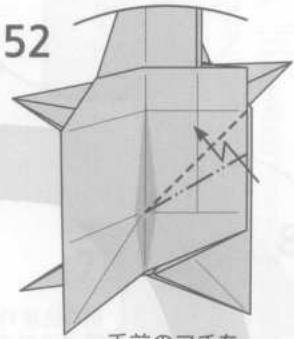
そのままフチを
折り返して
平らになるよう
折りたたむ

53



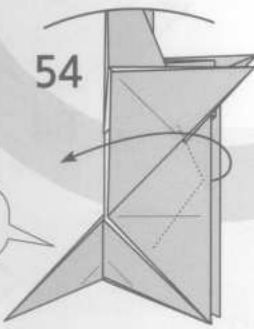
そのまま平らに
折りたたみ直す

52



手前のフチを
ついている折り筋で
斜めに段折り

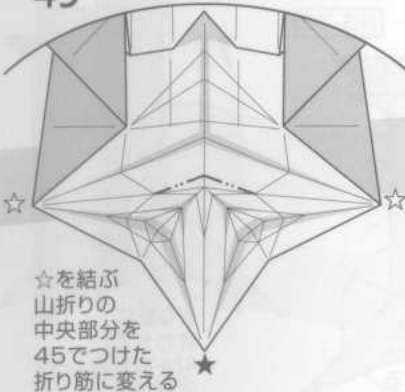
54



48と同じ
見た目に戻る

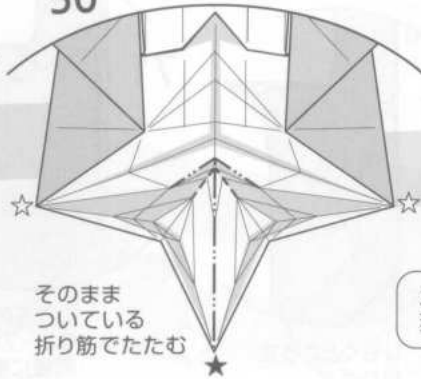
ふたたび
内側を見る

49



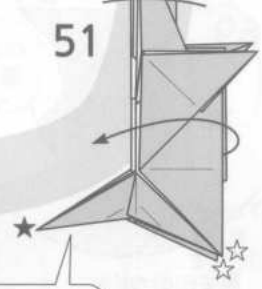
☆を結ぶ
山折りの
中央部分を
45度つけた
折り筋に変える

50



そのまま
ついている
折り筋でたたむ

51



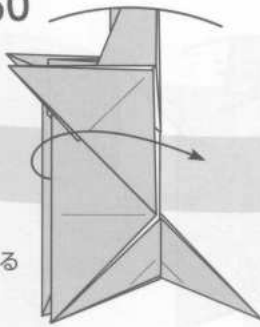
カドの向きが
変わっている

ひらいて
内側を見る

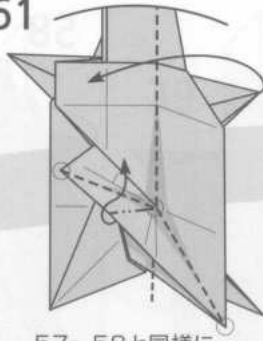
60



ひらいて
内側を見る



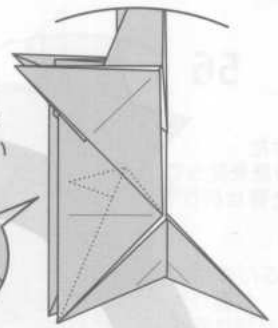
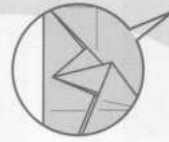
61



57~58と同様に
フチを上へ折り返して
折りたたむ

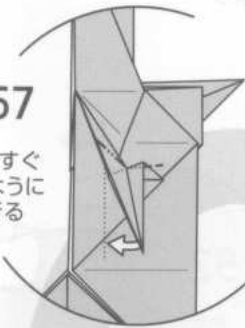
62

内側にある
カドは上側が
非対称で良い



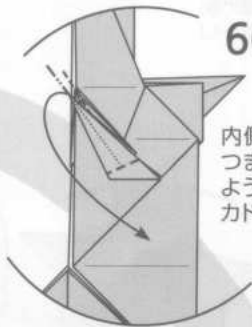
67

カドがまっすぐ
縦になるように
ずらして折る



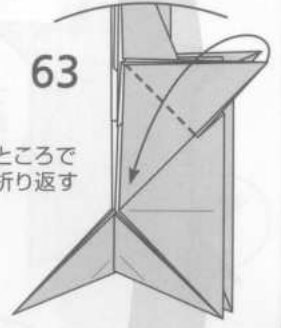
66

内側の層を
つまみ折りする
ようにして
カドを折り返す



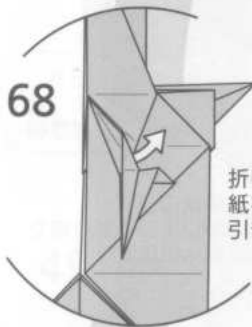
63

ひらくところで
カドを折り返す



68

折り込まれている
紙をはがすように
引き出す



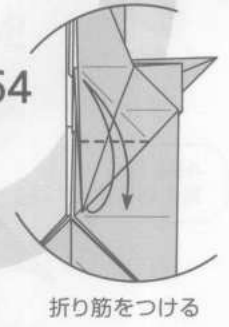
65

カドを
つまみ折り



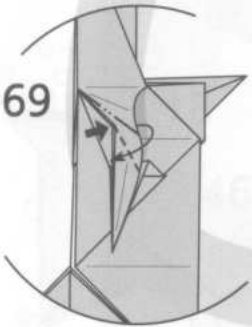
64

折り筋をつける



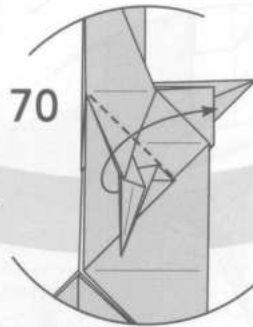
69

黒矢印のカドを
押し込んで、
引き出した紙を
かぶせるように
折りたたむ



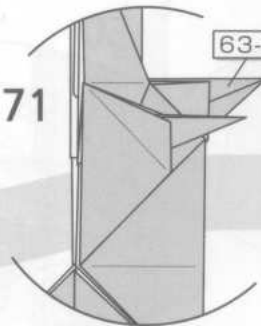
70

ひらくところで
折り返す



71

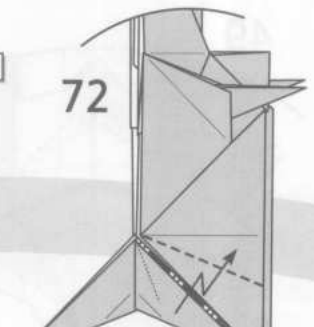
向こう側も
63~70と
同様に折る

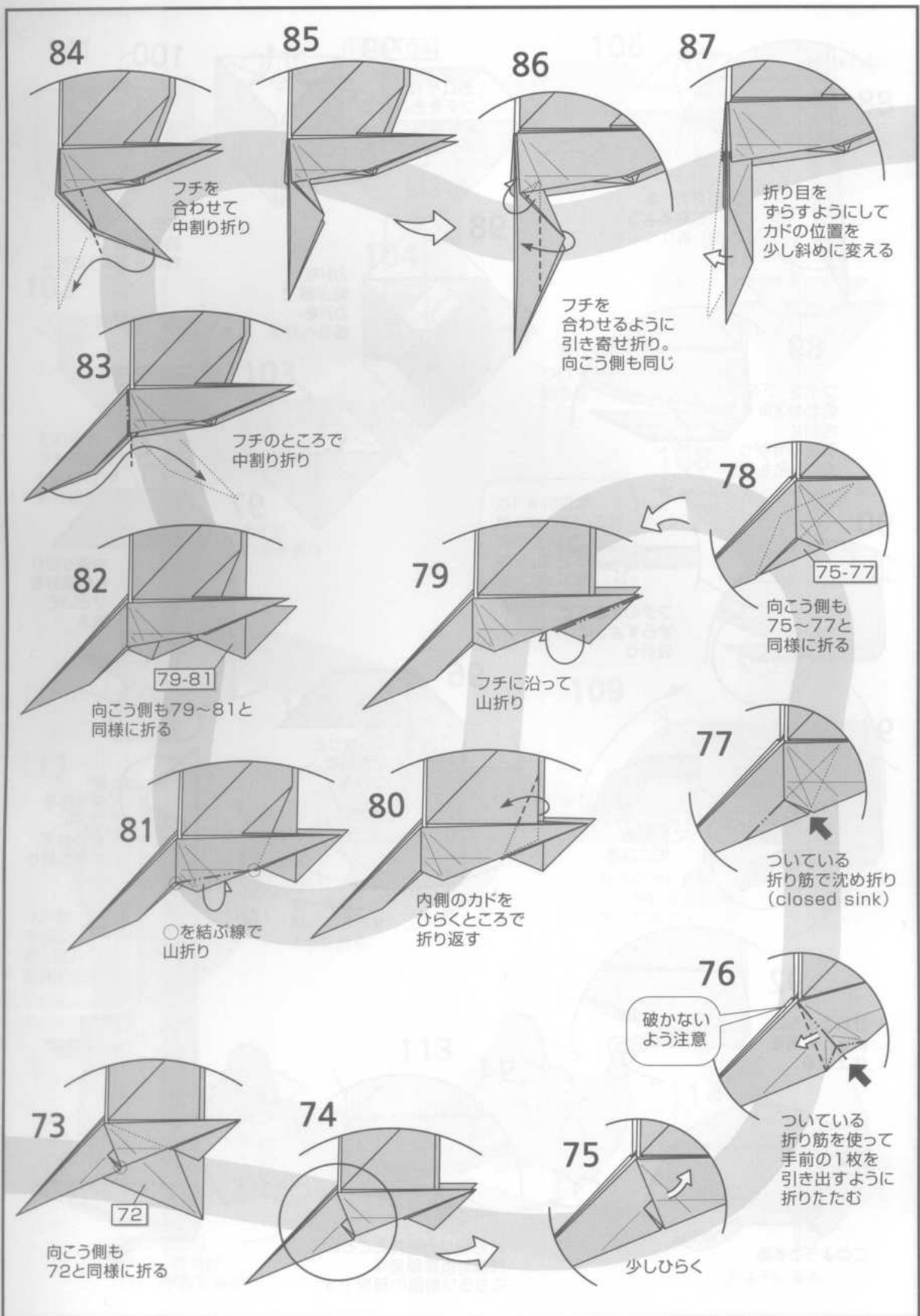


63-70

72

折り筋に
合わせて
引き寄せるよう
に段折り



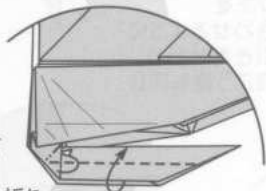


88



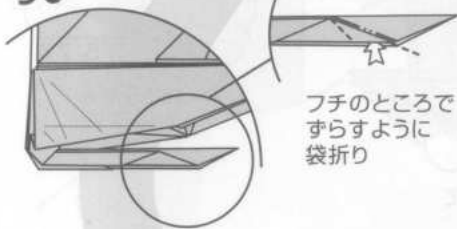
尻尾のカドを
水平になるよう
中割り折り

89



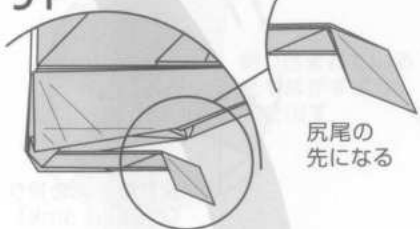
フチを
合わせて
内側に
引き寄せ折り。
向こう側も同じ

90



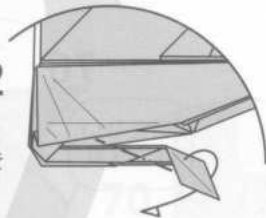
フチのところで
ずらすように
袋折り

91



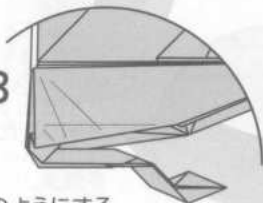
尻尾の
先になる

92



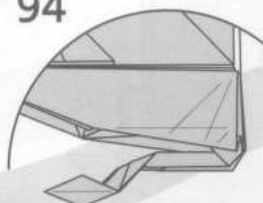
ひねるように
折って尻尾を
仕上げる

93



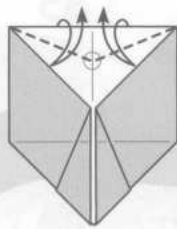
このようにする

94



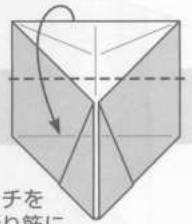
反対側から見たところ。
完成した造形では
こちらが前面の想定です

99



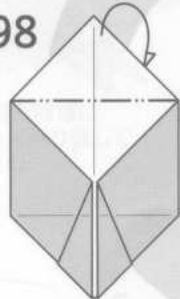
それぞれ
フチを合わせて
2枚重ねて
折り筋をつける

100



フチを
折り筋に
合わせるように折る

98



カドを
結ぶ線で
カドを
後ろへ折る

97



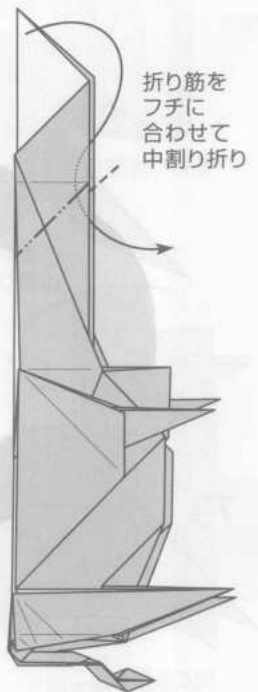
中割り折り
した部分を
ひらいて
見る

96



しっかりと
折り筋を
つける

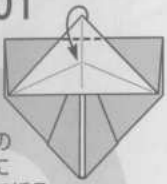
95



折り筋を
フチに
合わせて
中割り折り

101

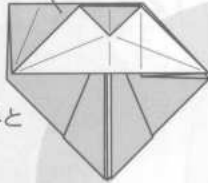
後ろのフチに沿って折る



103-104

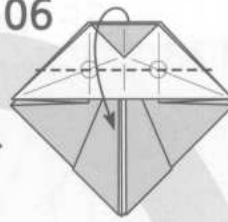
105

左側も103~104と同様に折る

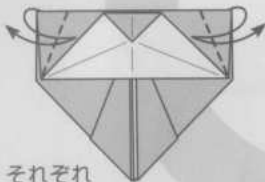


106

紙がずれないように注意して、○を結ぶ線で折る

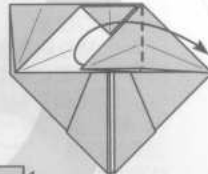


102



それぞれフチを合わせて2枚重ねて折り筋をつける

104



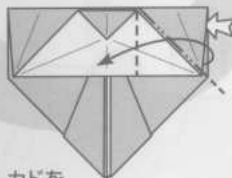
折り筋をつけてから折り返す

107



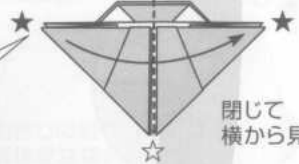
カドを結ぶ線でフチを後ろへ折る

103



カドをつまみ折り

108



カド★付近が厚くなっているが次の工程でひらくので、きちんと整えなくて良い

閉じて横から見る

幅の目安



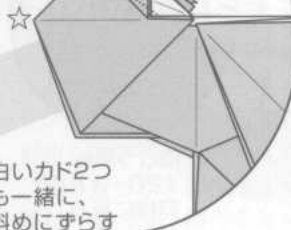
111

フチを平らに押し込んで立体的にする



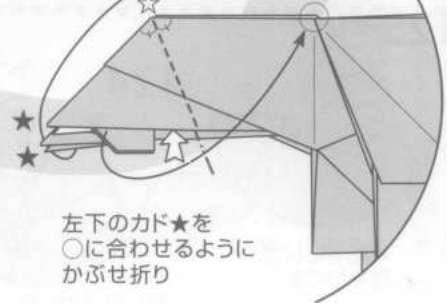
110

白いカド2つも一緒に、斜めにすらすらように折る



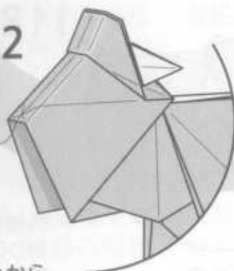
109

左下のカド★を○に合わせるようにかぶせ折り



112

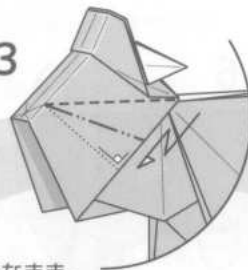
破かないよう気をつけてこのラインに折り目をつける



少し斜めから見た図。断面が「コ」の字型になる

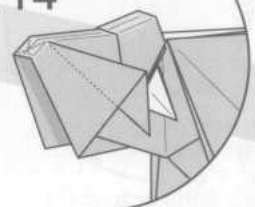
113

立体的なまま、ついている谷折りの折り筋を使って両側で段折り



114

このようになる



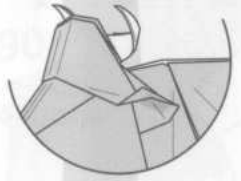
127



頭のできあがり

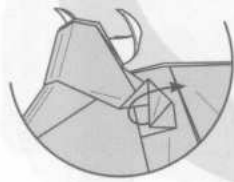


126



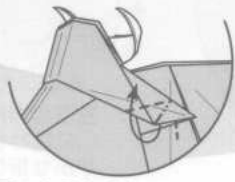
向こう側も
124~125と
同様に折る

125



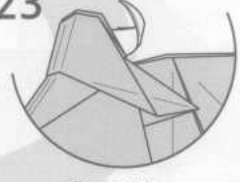
半開きにして
耳をつくる

124



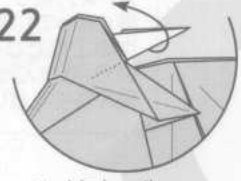
耳になるカドを
ひらいてつぶす
ように折る(ぐらい折り)

123



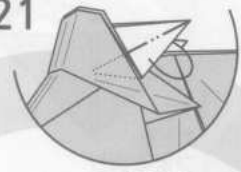
向こう側も
120~122と
同様に折る

122



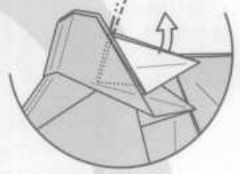
ツノをカール
させて仕上げる

121



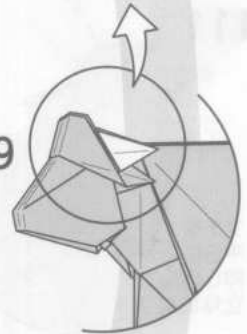
ついている折り筋で
フチを後ろに折る

120

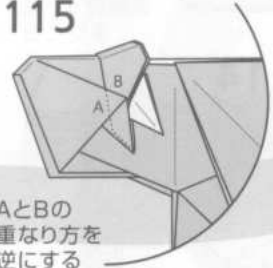


カドをわずかに
上にずらす(ぐらい折り)

119

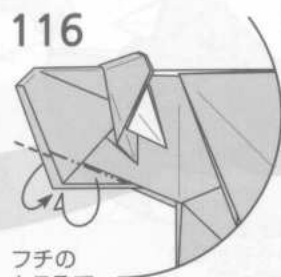


115



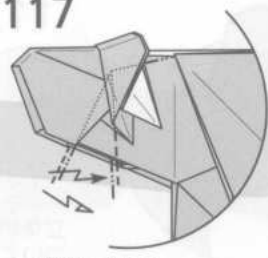
AとBの
重なり方を
逆にする
(開き留めになる)。
向こう側も同じ

116



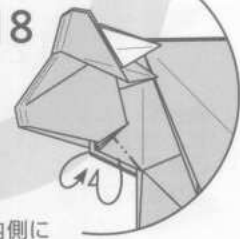
フチの
ところで
内側に折り込む

117



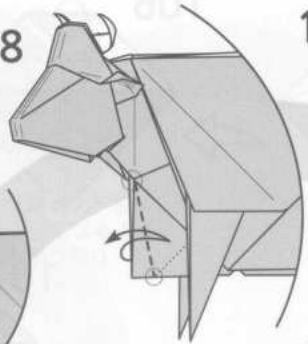
立体的に両側で
段折りして顔の向きを
変える(ぐらい折り)

118



内側に
折り込んで
留める
(ぐらい折り)

128



○を結ぶ線で
折り筋をつける

129

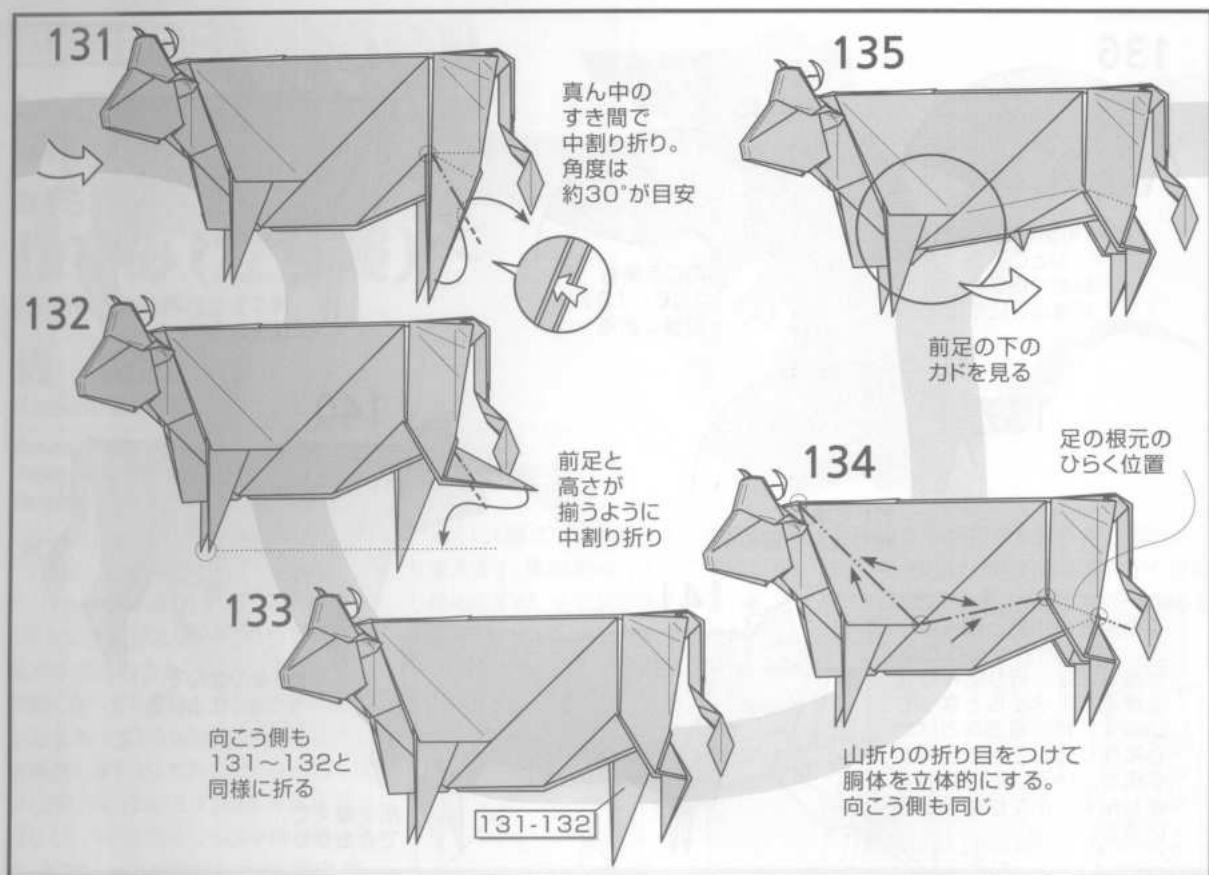


つけた
折り筋を使って
内側に隠すように
両側で斜めに段折り

130



胸のできあがり



131

真ん中の
すき間で
中割り折り。
角度は
約30°が目安

135

前足の下の
カドを見る

132

前足と
高さが
揃うように
中割り折り

134

足の根元の
ひらく位置

133

向こう側も
131~132と
同様に折る

山折りの折り目をつけて
胴体を立体的にする。
向こう側も同じ

131-132

おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

ありがたいコミュニティ

A Community to Be Grateful To

平原祐輔

Hirahara Yusuke

折り紙界には、本職はサラリーマンで、作品創作やイベント参加を趣味の範囲で楽しんでいる人が沢山います。

私もその一人です。社会人歴は5年、つい先日まで学生だと思っていたのに、いつの間にか中堅社員に片足を突っ込んでいます。

さて、過去5年間と学生の頃を比べてみると、日常生活の中で友人知人を増やすのが実に難しくなると感じます。会社の人間関係は限定されているし、同年代の社員はそれほど多くない。加えて、仲の良かった高校・大学の友人とも、居住地や生活環境の違いもあり、連絡の頻度は減りつつあります。

そんな中、10年以上に亘り定期的に会う友人が何人もいる、大変あ

りがたいコミュニティがあります。それが折り紙です。

振り返ってみると、最初の折り紙友達は十数年前、創作を始めた高校生の頃に出来ました。

その後大学に入学して早々に出会ったのが、学科の2個上の先輩であり、現在書籍紹介を本誌に連載中の仮屋蘭さんです。

さらに私が学部生だった時期は、全国の大学で折り紙サークルが続々と設立された時期であり、大学間で積極的に交流しようとする動きがありました。そこで知り合えた同世代の折り紙友達は20人前後にも上ります。折り紙という共通項のおかげで社会人になっても関係は途絶えず、何かの機会に今でも会えていることは素晴らしい事だと感じます。中には折り紙関係な

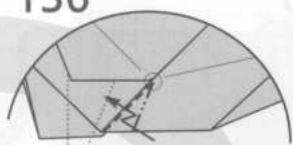
く会う友人もいます。

そして何よりも嬉しいのは、今でも知人友人が増えていることです。先日のコンベンションでも数名の方と初めてお話し出来ました。

ということで、私の友人知人のうち、折り紙関係者が占める割合は増加の一途を辿っています。一人で黙々と本に載っている作品を折っていた小中学生の頃には、こんなことになるとは想像もできませんでした。

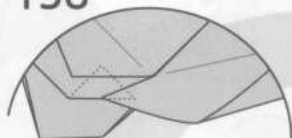
折り紙に元から興味のある人とは、どんどん知り合えているので、次にやることは折り紙に興味のない友人を折り紙コミュニティに引きずり込むことでしょうか。そのためにまずは折り紙と関係のない友人を増やさねば。

136



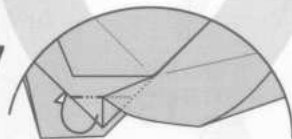
(前足のカドは透視)
○のところで
斜めに段折り。
角度は22.5°が目安

138



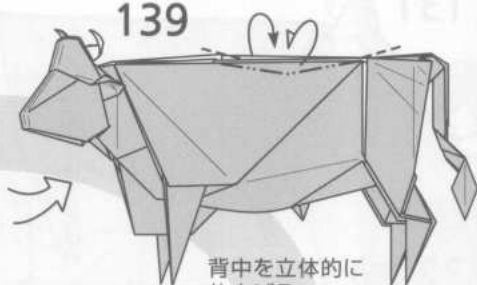
向こう側も
136~137と
同様に折る

137



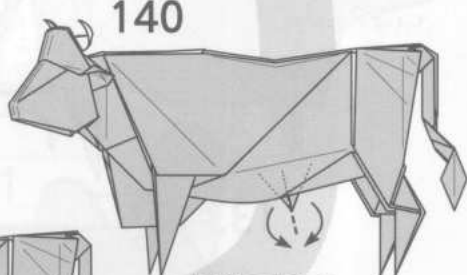
カドを後ろに
折り込んで留める

139



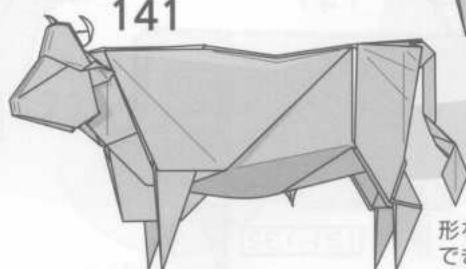
背中を立体的に
仕上げる

140



カドをつまんで
毛らしく仕上げる

141



形を整えて、
できあがり

私の過去の作品と比べると、“比較的ざっくりとした基本形を、折り込んで仕上げる”スタイルとなっています。特に頭部などはさらに作り込むことも容易です。いろいろ工夫して楽しんでいただけたらと思います。

折り紙千夜一夜

One Thousand and One Nights of Origami

第8夜

銀紙で折るぎんのひこうき

Fold in silvery paper
Silver origami plane

前川 淳 Maekawa Jun
日本折紙学会 評議員代表

昨年刊行された、若い歌人・安田茜さんの第一歌集『結晶質』に次の一首があった。

きずついたゆめの墓場へゆくために
銀紙で折るぎんのひこうき
安田茜

「ゆめの墓場」という表現は、『赤毛のアン』の一節を連想させる。「あたしの一生は『うずもれた希望の墓場』だわ」(村岡花子訳)というものだ。アンは「なにか、がっかりしたたんびにそういつては自分をなぐさめているの」と語る。大人になったら髪の色が変わるひとはいないのかと、養母のマリラに訊いたさい、「知らないね」とすげなく返されたときの言葉である。アン・

シャーリーの心の中の墓地には、黒髪になる希望や家族を持つ希望などを埋めた墓石が並んでいるのだ。

もともと、アンの破れた夢を埋めた墓地というのは、自分でも「とてもすてきにロマンチックにひびいて」と言っているように、公園の花畑のような明るさがある。なお、わたし自身にはそのような心象はなく、それに近いのは、読みかけたままの本、まだ開いてもいない本が並ぶ、心の中の本棚というイメージである。

というわけで、わたしは中に本棚があっても墓地はないので、そこに行くための銀の飛行機も不要なのだが、歌人が、心の墓地に向かう呪術(?)として折り紙の飛行機を連想したという

のは興味深い。じっさい、折り紙を折る行為が、瞑想というか、心の深いところに潜行してゆく感覚は、折り紙好きならだれしも持っているものだろう。そして、銀紙ということでは、次の短歌も連想した。

銀紙で折ればよいよ寂しくて何犬だらう目を持たぬ犬 石川美南

銀紙の寂しさは、生き物らしさとかけ離れてしまうという感覚だろうか。現代の折り紙には目を表現している作品もあるが、多くの折り紙の動物作品に目がないのもたしかである。この寂しさは、アンの「希望の墓場」に通じるような、どこか懐かしい、優しい寂しさである。

展開図折りに **挑戦**

Crease Pattern
Challenge!

第153回

ねずみ(立ち姿)

Mouse (Standing)

霞 誠志

Kasumi Seishi

Created: 2024/05

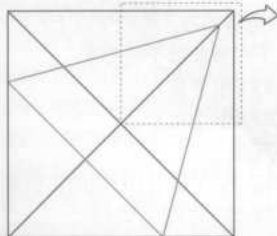
Paper Size: 30x30cm

Height: 12cm

本作は、30度メッシュ構造を元に創作したものです。最初は前歯・ヒゲ・目も作る計画でしたが、顔の造形をリアルに仕上げようとするとねずみの可愛さや凹凸の少ないスルンとした感じが無くなってしまいますので(自分の技術力不足もあって)今回は目や歯を造るのは断念しました。ただ、ヒゲの名残りは少しだけ残っています。ねずみは体長と同じくらいの長さのしっぽを持っています。そこでしっぽの領域を十分に取る為、(図.1)のように正三角形を配置しました。後ろ足になる正三角形の頂点2つを用紙の縁&残りの1つを用紙内部に置いたこの配置は等分割数(本作は16等分)を変える事で領域の大きさを自由に調整できます。当初の計画よりリアルさが減りましたが、ねずみの特徴を出す為に耳の形にこだわって造っています。頭側にある長方形の特徴的な折り筋がそれです。特に耳と首周りを構成している折り筋は後ろ足の指を折りだす為の折り筋に自然に繋がっており、ここが一番のポイントになっています。加えて耳の丸い感じが出るように使っている六角形の構造も気に入っています。展開図の<A>は平坦に折り畳める基本形の図です。右下半分は立体化した時のものですが、立体形状をうまく表現できない部分も多く(山折り線だけが集まっている箇所)仕上げの為の参考図として見てください。を折るとほぼ完成形になりますが、しっぽや後ろ足など細かい仕上げが必要です。折り方の助けになるように補助資料として、変則的な首周りの部分<全体の1/4を表示>(図.2)(図.3)を載せておきます。(図.2)を折

たあとに(図.3)のようにヒダの位置を折り変えます。展開図の<A>で平坦に折り畳めますが、平坦に畳めるのは(図.3)の前後の一時期のみです。全体を通して

立体的な形状のまま折り進む事になります。各部位は局所的に平坦に折り畳めるのでこれをうまく活用して折り進めてください。



<A> 図.1

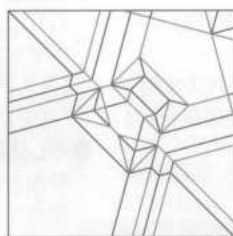


図.2

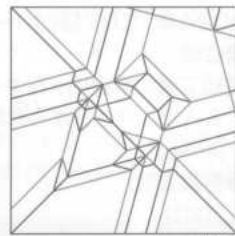
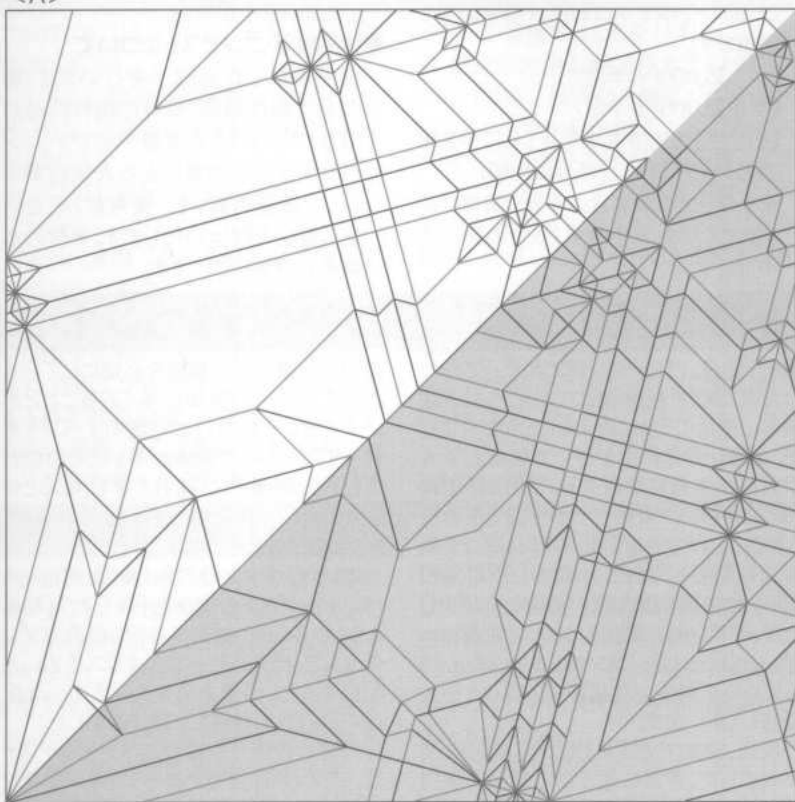


図.3







Rabbit Ear

つまみおり

Information

第14回折紙探偵団 名古屋コンベンション参加者募集

●日程

2024年12月7日(土)~8日(日)

●会場

愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス本館
名古屋市営地下鉄名城線「自由ヶ丘駅」
より徒歩1分。

●募集人数

200名

●参加費

2日間の金額です。1日だけの参加でも同額です。

【大人】5,000円(予定)

【学生】3,000円(予定)

【小学生】7,500円(小学生1名につき保護者1名が同伴した場合の金額)

※小学生と保護者は必ず同じ講習に参加してください。小学生1人での参加は不可です。

●懇親会

7日(土)希望者のみ。(高校生以上)
中学生以下の参加は不可です。

【大人】5,000円(予定)

【高生】3,000円(予定)

●申し込み方法

参加方法については、10月以降に折紙探偵団東海友の会WEBサイト
http://anabas-plan.net/joas_toukai/
でお知らせ予定です。

●作品展示・コンテストについて

会場内にて作品展示を行います。あわせて創作折紙(自身の創作作品に限る)コンテストも実施予定です。コンベンション参加者による人気投票を行い、最優秀賞1名、優秀賞2名を決定し賞品を贈呈いたします。多数の応募をお待ちしています。

コンベンションスペシャルゲスト

スペシャルゲストはJOASから
韓国の若手作家のチョン・ジェ
イル氏、おりがみはうすからハン・ジ
ウ氏を招待し、皆さまに楽しい交
流時間を過ごしていただきます。

JEONG JAE IL

1993年生まれ。韓国で生まれ、現在半
導体エンジニアとして勤務
し、折り紙作家活動を兼ねて
います。さまざまな対象から
受けた感じや雰囲気 작품을
に盛り込むことを大切にし
ます。対象の精密な描写よりは、折り紙ならではの独特
の造形美を活かすために常に悩みます。
https://www.instagram.com/jaeil_origami/

チョン・ジェイル氏



ハン・ジウ氏

HAN JI WOO 1995年生まれ。韓国折紙協会の創作委員として活動している。毎年『ORIGAMI PRO』シリーズの出版に参加し、収録作品と「テストフォルダ」を担当している。ボックスブリーツ技法で人間型作品を作ることに関心を持って創作活動をしている。https://www.instagram.com/jiwoo_origamist/

作品展示及びコンテストの参加は、コンベンション参加者のみとなります。

●折紙教室講師募集

名古屋コンベンションで、講師を担当していただける方を募集します。この機会に講師として参加してみませんか。詳細は折紙探偵団東海友の会WEBサイト(http://anabas-plan.net/joas_toukai/)をご確認ください。

●折紙指導員認定試験

名古屋コンベンション開催中に、日本折紙学会折紙指導員制度に基づく指導員認定も行います。受験者を募集しますので、資格取得をご希望の方は、公式サイトをご覧ください。



◆第29回折紙探偵団コンベンションレポート

西川誠司

■8月10日、11日の2日間にわたって行われた第29回折紙探偵団コンベンションは無事に盛会のうちに終えることができました。会場は昨年に引き続いて東京大学大学院農学生命科学研究科の岩田洋佳教授のお許りで東京大学弥生講堂をお借りすることができました。今年はコロナ禍の人数制限も取れて会場ホール定員の300名まで現地参加者の募集を広げましたが、昨年同様に募集3日ほどで定員いっぱいとなりました。コンベンションを心待ちにしてご期待いただいていることを大変嬉しく思います。

反面、参加できずに残念とのお声も聞かれました。定員に達するのが早い理由の1つが、安全を考慮して小学生以下の

参加に保護者のご参加を必須にしているためご家族での参加が多くあることと思いますが、それだけこの夏のイベントを待っておられるご家族が多いことの表れでもあり、開催中に「連れてきて、ほんとに良かった。」と声をかけていただく場面もあり良かったと思います。

コンベンションのスタイルは、初日にスペシャルゲストの講演を行い、7つ(昨年より1つ多い)の並列する折り紙教室プログラムで、そのうち一つのクラスをZoom配信するという基本スタイルで、Zoom配信のみの参加登録も70名ありました。

今回の吉野一生基金スペシャルゲストは、フランス在住でアコーディオン奏者を本業とする合谷哲哉さんと、韓国の若手

作家の取りまとめ役でもあるキム・ジンウさんでした。ともに大変興味深い講演と折り紙教室で参加者を楽しませました。なお、Zoom配信された折り紙教室、スペシャルゲスト講演、展示会ツアーについては、録画配信が12月末まで視聴可能で、あらかじめご登録のあった参加者の皆さまには既にメールにてご案内済みです。

今回は、振替休日となった12日(月)には、東京大学大学院総合文化研究科の館知宏教授(日本折紙学会評議員)が代表の学術シンポジウム(学術変革B主催)が開催され、3日間の折り紙イベントを楽しんだ方も多かったと思います。

◆WOD 2024 10/24~11/11

WOD(ワールド・オリガミ・デイズ)は、世界の折り紙普及に貢献したリアン・オープンハイマー氏の誕生日である10月24日から、1980年に日本で制定されたおりがみの日、11月11日までの期間、世界中の多くの人々にもっと折り紙を広めていくことを目的として、様々な折り紙活動をしよというものです。OrigamiUSAとJOASでは、このWODをより大きく広げるため2011年から連携して活動を行っています。

OrigamiUSAが主催する“World Origami Days 2024”は、2024年10月25日から11月12日(アメリカ時間)まで開催され、19日間の折り紙講習がリモート提供されます。登録は9月16日に開始されます。

OrigamiUSAは、Zoomを介して世界中の折り紙愛好家とリモートでWorld Origami Days(WOD)を祝うことを嬉しく思います。OrigamiUSAのOrigami ConnectとPCOCチームは、2024年10月24日から11月11日までの19日間のオンライン折り紙講習を企画しました。各日で異なる折り紙カテゴリー(テッセ

レーション、ユニット、造形など)を取り上げます。今年は、より多くのタイムゾーンの参加者が生中継で参加できるように、週末の時間を変更しました。月曜日から金曜日の時間はアメリカ太平洋夏時間(PDT)の午後遅く/夕方、土曜日と日曜日の時間はPDTの午前中です。各講習のタイムゾーンの具体的な時間については、各講習を参照してください。World Origami Days 2024は、2025 Pacific Coast OrigamiUSA Conference(PCOC)の寄付イベントとなります。詳細については、以下WOD2024のWebサイトをご覧ください。

OrigamiUSA WOD2024公式サイト:
<https://origamiusa.org/wod2024>
(野口マルシオ)

【私のWOD報告】

2014年から始まったJOASが主催するSNSを利用した折り紙作品紹介企画です。WODの期間中、あなたが折ったお気に入りの作品をSNS(Facebookの場合はWODページ)に投稿してください。掲載する写真の撮影には「WODエントリー

WOD World Origami Days

シート」を使います。指定のシートを日本折紙学会の公式サイトからダウンロードして、作品名、折り手の名前、作品の作者名、在住地域(国)を記入してシートの上に作品を置いて撮影してください。記入した部分を写真に貼り込む方法でもかまいません(WOD特設ページの説明写真参照)。ハッシュタグは#MyWODです。投稿写真は、アートミュージアム展示にも使用されます。

【アートミュージアム展示】

FacebookやX(旧Twitter)、Instagramに投稿された「私のWOD」の写真や、「折り紙テーマ展」に応募された作品の写真を、10月24日よりWOD特設ページ(JOAS公式サイトでご案内予定)に順次掲載します。

【折り紙テーマ展】

テーマは来年の干支「巳(へび)」です。投稿者本人の創作であれば、新旧は問いません。

◆第37回折り紙の科学・数学・教育研究集会(九州大学)

11月30日(土)、12月1日(日)に、九州大学・大橋キャンパスにおいて、第37回折り紙の科学・数学・教育研究集会を開催します。対面開催が復活した昨年からの2日間の日程とした当会は、今回も同様に2日間での開催となります。なお、2日目に予定している各研究者の発表はオンラインでも配信します。

発表される研究内容は、数学、工学、生物学、歴史研究と多岐にわたります。専門的な内容を含むものもありますが、折り紙研究の分野を超えた広がりを知るよい機会ですので、ご参加をお待ちします。会では、参加者にじっさいに手を動かしてモデルを作成してもらってワークショップ

形式にも力をいれています。日程の概要は以下です。

- ・11月9日:発表者締め切り(ウェブから申し込み。発表者には資格の制限などはありません)
- ・11月13日:参加申し込み開始
- ・11月30日、12月1日:当日

今回の会場である九州大学芸術工学部がある大橋キャンパスは、博多の中心部から近い西鉄天神大牟田線大橋駅から徒歩5分の交通至便な場所にあります。芸術工学部では、工学や技術に関する科学的な知識、人間や社会に対する深い洞察、そして創造的な芸術的センスを兼ね備えた設計家あるいはデザ

イナーを養成することを目的としています。前身の九州芸術工科大学(1968~2003)では、「技術の人間化」という進歩的なスローガンをかけ、いかに技術を人間生活に適合させるかを教育してきました。広義のデザインを意味する「芸術工学」を冠する会場は、まさに分野を超えて発展する折り紙の研究発表に相応しい場だといえるでしょう。1日目にはキャンパスツアーも予定しています。大橋キャンパス内のバイオフードラボ、セラミックラボなどユニークな研究設備の紹介に加え、マイクロCTスキャナやセラミック3Dプリンタのデモンストレーションも行います。

前川淳
斉藤一哉(九州大学)

◆布施知子 北アルプス国際芸術祭2024



長野県大町市、北アルプスの麓で開催される「北アルプス国際芸術祭2024」に布施知子さんが出展されます。百年以上続く市民大学として受け継がれてきた信濃木崎夏期大学の広大な畳敷きの部屋を舞台に、紙の柔らかさと陰影が静謐な空間を表現する作品「紙の庭園」が展示されます。

【開催期間】2024年9月13日(金)~11月4

日(月・祝) 水曜定休

【開館時間】9:30~16:30

【布施さん作品会場】信濃木崎夏期大学
長野県大町市 平木崎 7243)

【入館料】300円 もしくは芸術祭作品のほとんどを鑑賞できる「作品鑑賞パスポート」の提示

【駐車場】あり(会場まで徒歩で約5分)

【公式サイト】<https://shinano-omachi.jp/>

東北友の会～東北大学大学祭で折り紙サークルORUXEとコラボ

東北友の会は、2016年に発足以来、東北大学の折り紙サークル「ORUXE」と活動をともにして参りました。大学の学祭では、共同で作品を展示したり来場者に講習したりと活動して参りました。今年度は4年ぶりの参加となります。

今年度の大学祭のテーマは、「綴る(つづる)」ということなので、「ORUXE」代表の高橋玲さんと話し合い、我々のテーマは、「秋を綴る」と「鶴を綴る」といたしました。

「秋を綴る」は、「ORUXE」と友の会メンバーとで、作品を持ち寄ることになりました。植物や動物、虫などの作品をならべながら、秋を綴りたいと思います。一方、来場された方々には大小いろいろな「鶴」を折っていただき、盆栽に見立てた枝に「鶴」を綴っていただくことにいたしました。また、日本折紙学会の紹介や、探偵団マガジンを見

ながら自由に折ることができるコーナーも設置する予定です。

東北大学の大学祭は、下記のとおりです。1日、それも平日しか場所を確保することができなかったため、なかなか来場するのが難しいとは思いますが、お越しいただければ幸いです。

日時:2024年10月25日(金)9:00～16:00
場所:東北大学 川内キャンパスC203教室(50人教室)

展示テーマ:「秋を綴る」

参加テーマ:「鶴を綴る」

展示内容:折り紙作品展示・来場者による「鶴」の盆栽作成・日本折紙学会の紹介・コンプレックス折り紙体験等

連絡等:折紙探偵団東北友の会

代表 福島邦幸

Mail:K-fuku@mve.biglobe.ne.jp

おりがみはうすギャラリー再開

ギャラリーの公開を有料、予約制にて再開いたしました。

コロナ禍以降閉鎖していたギャラリーを公開するにあたって、滞在時間と人数の制限を行わせていただきます。

公開時間:11:00～17:30(入場17:00まで)

滞在時間:30分まで

人数:1組最大5名まで

見学科:1名 300円(日本折紙学会会員は無料、要予約)※見学科の半分はJOAS(日本折紙学会)への寄付となります。

再開後これまでに来られた見学者数6月105人、7月146人、8月159人、9月26人(9月10日現在)の見学科合計130,800円この内65,400円がJOASに寄付されました。見学の予約は専用フォーム(<https://x.gd/TWUix>)をご利用ください。

各地の折紙探偵団友の会例会予定

2024年10月、11月のオンライン例会には2024Q3オンラインパスポートが必要です。日本折紙学会ホームページからお求めください。

東京友の会 ※オンライン例会

●10月5日(土)

14:00～

会場:Zoomによる

オンライン配信

講師:長山海澄

作品:「立方体から

生えるクリスタル」

その他:正方形6

枚使用(15cm推奨)

●11月2日(土)14:00～

会場:Zoomによるオンライン配信

講師:中村楓

作品:「ニシキヘビ」



東海友の会 ※ハイブリッド例会

●10月19日(土)13:00～15:30

会場:愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス本館2F201

※名古屋市営地下鉄名城線「自由ヶ丘駅」より徒歩1分。

参加費:大人500円、中学生以下200円

講師

南島和英

作品1:鳩

講師

苜谷知弥

作品2:未定

その他:会場

周辺に駐車場

が少ないので

公共交通機関をご利用下さい。

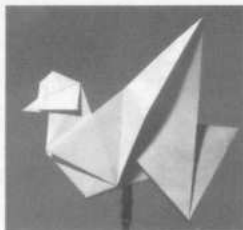
●11月3日(日)13:00～15:30

会場:10月と同じ

参加費:大人500円、中学生以下200円

講師:1)水野健、2)未定

作品:1)未定、2)未定



関西友の会 ※折り紙は各自持参

●10月20日(日)13:10-16:45予定

会場:ウイングス京都セミナー室B

地下鉄烏丸御池駅(5番出口)または地下鉄

四条駅・阪急烏丸駅(20番出口)下車5分

参加費:大人500円、中学生以下300円

講師:佐藤悠樹 作品:雪うさぎ

講師:稲吉秀尚 作品:カメ、ウサギ

●11月17日(日)13:30-16:50

会場:大阪市立阿倍野市民学習センター

参加費:大人500円、中学生以下300円

講師:山口之彦 作品:ソウ、朝顔の箸袋

九州友の会 ※ハイブリッド例会

参加費:大人500円、中学生以下100円

その他:Q3保持者はリアル参加費300円

●10月27日(日)

時間:14:00～16:30

会場:佐賀アバンセ&Zoom

講師:滝口忠

作品:魔女

●11月17日(日)予定

時間:14:00～16:30

会場:アバンセ&Zoom

講師:未定 作品:未定

静岡友の会 ※折り紙は各自持参

●10月 例会なし

●11月10日(日)10:00～15:00

会場:清水興津生涯学習交流館

参加費:大人500円、中学生以下200円

講師:小崎重碩(こざきしげひろ・中2)

作品:ダイヤモンド(神谷哲史・作)

その他:午後は各自自由に折り紙を折って

楽しめます。

○静岡友の会ブログにて随時情報を掲載

します。<https://origami.eshizuoka.jp/>

東北友の会 ※折り紙は各自持参

●10月20日(日)10:00～16:00

会場:仙台市八木山市民センター

参加費:300円(会場費)

その他:東北大学の学祭参加作品等持参

●11月17日(日)10:00～16:00

会場:仙台市八木山市民センター

参加費:300円(会場費)

その他:自由折り(必要なものは持参)

連絡先:福島邦幸

k-fuku@mve.biglobe.ne.jp

吉野一生基金への寄付報告

第35期9月6日現在、99名の方から合計948,800円の寄付をいただいております。ご協力ありがとうございます。皆様のお陰で、海外から優秀な若手作家や著名な作家を招くこととJOASの活動ができています。ご協力くださった方々のお名前を、感謝の気持ちを込めて掲載させていただきます。(50音順、敬称略)

1口:藤原具

5口:山川幸代

15口:岡田歩久登、九州友の会

日本折紙学会公式HP

<https://origami.jp/>

折紙探偵団マガジン

2024年9月25日発行 第35巻3号 通巻207号

発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/前川 淳

編集人/野口マルシオ

編集人補佐/山口 真

編集スタッフ/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

おりがみはうす商品案内

このページの商品の取扱いはすべておりがみはうすです。
日本折紙学会とは別になります。

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



好評発売中!
第29回 折紙探偵団コンベンション 折り図集 Vol.29

日本折紙学会 編 / 3,080円(税込) / 送料 540円 / B5判 / 全272頁 / 41作品収録
2024年8月に行われたコンベンションに合わせて発売。国内外より投稿された41作品の折り図を収録

書籍名 / 著者・编者	価格(税込)	送料	内容
勝田恭平折り紙作品集2	勝田恭平 著 3,850円	※ 10/1からの郵送会社の運賃値上げに伴い、送料を改定します	B5判 / 全180頁 / 12作品収録
北條高史折り紙作品集	北條高史 著 4,400円		B5判 / 全212頁 / 11作品収録
萩原 元折り紙作品集	萩原 元 著 3,520円		B5判 / 全180頁 / 20作品収録
勝田恭平折り紙作品集	勝田恭平 著 3,520円		B5判 / 全180頁 / 13作品収録
神谷哲史折り紙作品集3	神谷哲史 著 4,400円		B5判 / 全232頁 / 15作品収録
ユ・テヨン折り紙作品集	ユ・テヨン 著 3,190円		国内一律
クエンティン・トロリップ折り紙作品集	クエンティン・トロリップ 著 3,190円		1冊
神谷哲史作品集	神谷哲史 著 4,400円		540円 (梱包込)
神谷哲史作品集2	神谷哲史 著 4,400円		B5判 / 全232頁 / 16作品収録
西川誠司作品集	西川誠司 著 1,760円		2~3冊 = 750円
面~The Mask~	布施知子 著 1,815円	4冊 = 1,290円	
エリック・ジョワゼルー折り紙のマジシャン	山口 真 編著 5,280円	5~6冊 = 1,500円	
第28回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.28	日本折紙学会 編 3,080円	※4冊以上の発送は梱包等の都合上2つに分けての発送になります。	
第27回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.27	日本折紙学会 編 2,860円	B5判 / 全272頁 / 35作品を収録	
第26回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.26	日本折紙学会 編 2,640円	B5判 / 全272頁 / 47作品を収録	
第25回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.25	日本折紙学会 編 2,750円	B5判 / 全304頁 / 57作品を収録	
第24回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.24	1,375円	B5判 / 全304頁 / 61作品を収録	
第23回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.23	1,375円	B5判 / 全304頁 / 64作品を収録	
第22回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.22	1,375円	B5判 / 全304頁 / 61作品を収録	
第21回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.21	1,265円	B5判 / 全288頁 / 57作品を収録	
第20回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.20	1,265円	B5判 / 全288頁 / 61作品を収録	
第19回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.19	1,265円	B5判 / 全288頁 / 53作品を収録	

半額セール実施中

半額セール実施中

商品名	価格(税込)	送料
株式会社トーヨー 単色おりがみ色見本帳61色	385円	180円

※2冊、2セット以上の送料はお問い合わせください

折り紙用紙専門のオンラインショップ!

おりがみはうす
オンラインショップ

<https://www.olshop.origamihouse.jp/>

おりがみのトーヨーの商品を

25%引きで販売中!

※劇作専科・アウトレット商品等を除く・発送は週1回木曜日

詳しくは
検索サイトで

おりがみはうす

検索

商品のお申し込み方法

先に郵便振替が現金書留で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を送らせて頂きます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れのない様お願いします。

郵便振替番号 00120-9-715400

加入者名 おりがみはうす

※PayPalによるお支払いも可能です。

詳細は公式HP <https://www.origamihouse.jp>まで

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。

※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。

※現金書留の場合は下記の住所へお送りください。

※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。

※書籍と紙はそれぞれ別発送となります。

※商品名、数量及び料金をよくお確かめの上ご注文ください。



ギャラリー おりがみはうす

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216

TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080

E-mail: info@origamihouse.jp

月~金 12時~15時 土・日・祝 10時~18時

About - Origami Tanteidan Digest

The Tanteidan Digest has the objective to share the articles on Origami Tanteidan magazine and provide an English summary of most (but not all) articles. The numbers indicated as "Page xx" refer to the page numbers of the original articles in the magazine.

While not everything will be translated, we hope it will give you an idea about content of the article. Depending on the context, a "Translator's Note" will be provided for clarity or terms that might not translate easily either because of the language or technical nature.

We hope you will enjoy. Let us know if there is anything we can do to improve or any further

comments. Please contact our editorial department at: info@origamihouse.jp

Table of contents

- (Page 7) Origami and Its Neighbors
- (Page 14) Close-up
- (Page 16) Here We Are, THE ORRRIGAMI TANTEIDAN
- (Page 17) Makoto or Not? Memoirs
- (Page 18) From the Bookshelves of the JOAS Library
- (Page 37) Orisuzi ("Fold Creases")
- (Page 38) Origami-Zanmai (This Origami and That)
- (Page 39) Crease Pattern Challenge
- (Page 40) Rabbit Ear Information

Translated by Marcio Noguchi

**(Page 7) Origami and Its Neighbors
 #126 – A Red Ring Skirt
 By Tomoko Fuse**

After the delivery for the Echigo-Tsumari Art Triennale, the exhibition at RMIT University, 8OSME and Folding Australia are over, I am now preparing for the Northern Alps International Art Festival 2024, which will be held from September 13th to November 4th (it will probably be opening by the time you receive this magazine). The exhibits are almost all finished, and I am making structures to hold the models and boxes to store them in. So, cardboard, thick paper and plastic board are scattered around the room, and it is hard to imagine that I am doing origami. I sewed the large models together without using glue. I used cotton thread and kite string. I had a hard time threading the needle. I bought a threading kit, but my farsightedness has been compounded by astigmatism, so I was slow to use the tools. I could do it easily until I was in my 50s.

The Northern Alps installation is based on new models. If you have time, please come and see it. However, transportation is inconvenient, so I recommend you check it online.

I was hoping for this event, and I'm happy to be invited to the exhibition. However, financially, it's not enough. There is meaning in exhibiting my work, and I haven't thought about the income, but I don't think I can continue like this. Those who are thinking of making a living from exhibiting and selling their work in the future will need to negotiate how to present and sell it. It's not just origami, but making a living from art

is not easy.

An unfamiliar kind of butterfly flew in. It was a beautiful butterfly with red dots on the undersides of its white wings. I took a photo and looked it up, and found out it was a red ring skirt (*Hestina assimilis*) butterfly. It is designated as a specified invasive species. I was unsure, but I sent the photo to the Mountain Museum in Omachi City. The curator came to check on the Enoki tree, which is the food plant for the larvae, saying that although there have been reports of it in the prefecture, it has not yet been confirmed in Omachi. The area behind my house is off the walking route because bears infest it, so I didn't go there, but instead led him to an Enoki tree by the side of the road. I didn't find any feeding marks, but I came back to investigate again, and then left.

Things that were once commonplace become rare, and new species appear. Global warming comes to mind, and I can't welcome these changes with excitement and curiosity.

**(Page 14) Close-up
 Report - 8OSME 2024 in Melbourne
 By Yoshinobu Miyamoto**

Yoshinobu Miyamoto: Professor at the Department of Architecture, Aichi Institute of Technology (2008-), Nikken Sekkei (1986-2008: Bank of China Shanghai, Tokorozawa Aviation Memorial Hall, Japan Chemical Society Hall, Tokyo Midtown Galleria). He conceived architecture using "extended origami" that integrates folding, bending, and cutting.

■ Location: Melbourne

This conference started in 1989 as the "Origami Science and Technology Conference." Since 2001, it has been held every 4-5 years as the "International Conference on Origami Science, Mathematics and Education." However, due to COVID-19 pandemic in 2019, this was the first time in 6 years that the conference was held. I have been participating since the 6th conference, so this is my third time.

In terms of nationality, Japan was the most numerous, but there were many Chinese researchers among the participants from the United States and Australia. I think the advancement of Chinese researchers in the field of engineering is noteworthy. On the other hand, I was surprised that there were few participants from the United Kingdom, Commonwealth countries, and Europe, with which we have strong cultural ties. [Table 1-3] [Photo 1]

Melbourne has seen a population increase of about seven times over the past 100 years and has now grown to a size comparable to that of the metropolitan areas of Fukuoka and Nagoya. The historic townscape of this former Commonwealth colony is characterized by entrance porches decorated with cast iron ornaments, and the town is lively with shops and restaurants run by immigrants from India and Southeast Asia.

Swinburne University of Technology, where the event was held, is located in a residential area about 7km away, a 15-minute train ride from the city center. Glenferrie Station is on campus, and it is surrounded by a high density mid- to high-rise buildings. Despite it being the middle of winter, there were abundant parks and green spaces adjacent to the campus, creating a garden city landscape that is a model example of urban planning centered on public transport.

■ Overview of the Conference and Impressions of the Sessions

The conference was held over three days from July 16th to 18th, with invited lectures given in the early morning and sessions held in parallel from the latter half of the morning to the afternoon.

In the invited lecture, Professor Paulino introduced a video of a research method that utilizes deformation characteristics, while Professor Yu introduced a step-by-step method based on classical rigid body mechanics, showing contrasting approaches.

The session sessions were divided into four groups: "Engineering 1", "Engineering 2", "Mathematics, Computational Science, and History", and "Design and Education". I attended and gave a presentation in the "Engineering 1" session. Since the compilation and distribution of the proceedings did not arrive in time, it

was difficult to predict the content of the presentations from the title of the program, so I listened carefully to each presentation and tried to understand the flow of the session.

Below are some presentations from the "Engineering 1" session that left an impression on me. The sub-themes of the study sessions were "Rigid Origami" on the first day, "Rigid Origami," "Thick Origami," "Curved Origami," and "Other" on the second day, and "Kirigami" on the third day. Presentation styles varied widely, from monotone presentations by graduate students to highly polished slides by leading professors. Professor Howell (Brigham Young University), a leading expert on compliant mechanisms (mechanical mechanisms without friction or wear), was a prime example of the latter, and introduced his work with videos of numerous practical examples.

Professor Fanisri Pratapa (Indian Institute of Technology), the only participant from India, presented a method to control the bending and stretching of plate-shaped materials with Miura folding.

Malcolm Smith, a high school student from the United States, introduced a "spring-like" mechanism and an example of it in a relaxed, conversational style. He actively participated in questions and discussions throughout the conference, and was recommended for admission by J.K., a graduate of MIT who is well known in JOAS. Like him, Japanese high school students who present their research at the next OSME may have a chance of being recommended for admission to MIT.

In addition to mechanical research, Kirigami-related presentations included materials development by Professor Yuhan Hu (Georgia Institute of Technology) in the field of soft material chemical mechanics, and a presentation on molecular-scale three-dimensional structures by Professor Xinmei Xian (Guangzhou University).

In the afternoon of the third day, a graduate student from Southeast University gave a presentation on creating a thick Miura-fold structure using kirigami. Coincidentally, the same topic was covered in an invited lecture by Professor Zhong Yu in the morning of the same day. Unfortunately, the graduate student was not present at Professor Yu's lecture, so there was no opportunity to compare and discuss the two presentations.

In summary, in the field of engineering, it seems that research aimed at practical application is expanding, such as the active introduction of cuts, the elimination of thickness, the development of hinges, and the development of materials. In terms of mechanics, it was impressive to see research that aimed for comprehensive use, including non-flat folding and non-flat developable structures in addition

to the conventional flat folding and flat developable structures. While research is progressing in this way, it also seemed that an increasing number of researchers do not fully understand the cultural background and growth of origami.

■ Events and Cultural Exchange

In Australia, there is a system for showing respect for aboriginal culture at public events, and traditional music was performed at the welcome party held in the evening of the first day of the conference. The official dinner was held in a luxurious banquet hall at the arts center outside the university. This arts center is a renovated version of the old Hawthorn City Hall (completed in 1890) [Photo 2]. The dinner was held in a round table with 10 people seated freely, and I was accompanied by Professor Ying Yu of Shantou University, whom I met at the subcommittee. Professor Yu is a researcher in the Civil Engineering and Intelligent Construction Department of the Faculty of Engineering, researching computational mechanics and deployable structures, but originally chose the civil engineering department to study landscaping. As a mother whose son is more interested in Japanese anime and art than science and mathematics, she asked me for advice on the path to an art university. She also mentioned that while many researchers of origami engineering in Japan are from mechanical engineering departments, many in China are from civil engineering departments.

On the following day, July 19th, I participated in a shopping tour of Melbourne's art supplies and paper products with the guidance of Vice-chair Michael Assis along with a dozen other participants. We visited the following three stores, all of which had a wide selection of Western paper, washi paper (Awa paper), chiyogami paper, and other items (**).

While shopping, I met a high school student, Xian Yu. He is a member of the Western studies group at the High School Affiliated to East China Normal University in Shanghai, and attended the conference with extracurricular instructor, Chang Wenwu. After that, in the afternoon, I visited the Central Market and the National Art Museum with Yu, and in the evening, we went to an exhibition and lecture by Tomoko Fuse and others at RMIT University.

Following the conference, I also attended the "Folding Australia" convention held at the same venue from July 20th to 21st and spent a fulfilling week. During that period, I stayed at an Airbnb and could walk to the venue. The three-dimensional structural model exhibited in conjunction with the presentation was brought in as flat parts in a lunchbox-sized case, which was then unfolded and assembled at the

accommodation, and then transported to the venue. The house is over 100 years old, and the interior and exterior, as well as the garden, are well-maintained, making it a wonderful place with a sense of history. I was also able to take photos of my work "RES" (Photo 3). My conversation with the cheerful and friendly owner, Jane, was also a fond memory.

■ Tables

[Table 1] OSME Locations

1. 1989 Ferrara, Italy
2. 1994 Otsu, Japan
3. 2001 Asilomar, USA
4. 2006 Pasadena, USA
5. 2010 Singapore
6. 2014 Tokyo, Japan
7. 2018 Oxford, UK
8. 2024 Melbourne, Australia

[Table 2] Number of participants by country in BOSME

1. Japan (50)
2. United States (40)
3. Australia (25)
4. China (18)
5. Austria (6)
6. UK (4)
7. Estonia, Finland, Germany, Portugal (3)
11. Belgium, Brazil, Canada (2)
14. India, New Zealand, South Korea, Netherlands (1)
18. Other Countries (1)

[Table 3] Basic data

Keynote speakers 6 people (*), 162 participants, 17 countries
139 presentations:
. Engineering 69
. Mathematics, Computing, History 34
. Design, Education 36
7 poster presentations, 17 exhibitions
191 abstracts, 127 papers
Proceedings:
Vol. 1 Engineering 1
Vol. 2 Engineering 2
Vol. 3 Mathematics, Computing, History, Mental Health
Vol. 4 Design, Education

■ Photos

Photo 1. Group photo, Swinburne University of Technology Advanced Technology Centre

Photo 2. Event dinner, Arts Centre (former Hawthorne Town Hall)

Photo 3. Doorstop cat looking at RES

■ Footnotes:

(*) Invited speakers: Darryl Bedford (UK), Professor Yang Chen (Tianjin University), Professor David Epstein (University of California), Tomoko Fuse (Japan), Professor Glaucio H. Paulino (Princeton University), Professor Zhong Yu (Oxford University)

(**) Paper and art supplies shop

M.E.S. FITZROY 409 Gore Street, Fitzroy, VIC 3065

Kami Paper 217 Brunswick St, Fitzroy VIC 3065

Paperpoint 259 Coventry Street South Melbourne, VIC 3205

(Page 16) Here We Are, THE ORRRIGAMI TANTEIDAN

Report on three conventios: The 29th Tanteidan, Korean, and BOS Conventions Article by Tetsuya Gotani

Tetsuya Gotani = Born in 1974 in Oita Prefecture, currently living in France. Disseminating origami in France through origami classes, exhibitions and lectures. In recent years, he has focused on his own creative endeavors, but recently he has been motivated to fold and learn from the works of other artists. One of his representative works is the book "Origamix".

On August 10th and 11th, I participated in the 29th Origami Tanteidan Convention as one of the special guests. I would like to thank the Japan Origami Academic Society (JOAS) for inviting me, as well as Yamaguchi-san, Matsuura-san, and everyone at Origami House for all their help from the preparation stage to my stay in Korea the week after. Thank you very much.

After I heard about the invitation, I wondered if it was okay for me to be here as a Japanese person and wondered what was expected of me. I visited Origami House before the convention and listened to various stories from Yamaguchi-san, and I thought that I would be expected to sense something in my own way and use it in my activities.

On the first day, when I arrived at the venue, the Yayoi Campus of the University of Tokyo, everyone was running around preparing. As I helped pack goods into tote bags decorated with my Holmes model, I peeked at their name tags and saw that they were famous creators. I was surprised that they were helping with the preparations and management while also teaching their own classes.

For the lecture, I mainly talked about how I started doing origami in France and the details of my activities and kept the technical talk about "molecular puzzles" to a minimum. But I hope that the children who are

interested in creative work enjoyed it. I was touched when Nishikawa praised it, saying, "It's a realistic application of the circular domain molecular method." The lecture by Kim Jin-woo, the other special guest, was wonderful and made me feel the bond among Origami Pro members, so I decided to experience it live a week later. The first Holmes class was held in a hybrid format, online and class session. It was difficult to focus on the objects at hand while also being aware of the classroom, but everyone was able to complete it successfully. For the next class, owls, the classroom was long and narrow, making it difficult for people in the back to see, so it took longer than expected, and I would not have been able to make it in time without Kinoshita's help. In the exhibition space, we saw a wonderful group of complex and sophisticated models. Comparing my exhibit with the other exhibits brought up many points of reflections, and so, it was a learning experience.

At the social gathering, I used my privilege as a special guest to talk with the artists I admire. I had imagined an origami showdown that would continue into the night, but it was a friendly gathering with a bingo game over origami goods. Most of the participants were adults, but everyone enjoyed themselves like children. The next day, there was a two-hour class on flying mice, so I prepared four pieces of paper glued together and some enlarged parts. In the end, it somehow took shape, leaving only the final touches. The accompanying parents were baptized with complex origami, and I'm sure they couldn't look their children in the eye for a while!

Thank you very much to all the participants. My only regret is that there were so many artists whose names and works I couldn't match with their faces, so I couldn't greet them. Next time, I'll greet everyone. After the very satisfying convention, I was invited to a party. There, the artists who had been very active in volunteering and classes gathered with fulfilled faces. They are now respectable members of society, but they have known each other since they were origami boys. At the end of the meeting, I felt very warm listening to Yamaguchi introduce each person and encourage them. There are people who work hard to maintain a place to share the love of origami, and I felt happy to be included in their group through this convention.

The following week, I also participated in the 14th Korea Origami Convention held in Seoul. The atmosphere was very different from the Tokyo convention, with many women running the convention (Editor: Most of the people working at the reception desk are staff of the Korea Origami Association), and among them was a lively group of energetic young men, mainly Origami Pro. There seemed to be many

elementary school boys and their mothers among the participants. The whole atmosphere was like a big family, with a kind mother, a cool older brother, and a cute younger brother. However, once the class started, the children worked hard folding difficult problems as if they were in a tutoring school. I could see that the children who had mastered complex system models as if it were compulsory education were the ones who would carry the future of the Korean origami world.

The following week, I also participated as a special guest at the BOS (British Origami Society) Autumn Convention held in Edinburgh. The first thing I noticed when I saw the models created in the class and the exhibits was that there were many enthusiasts of modular origami. The participants also seemed to be mostly adult women, and I felt a little out of place as a complex origami artist, but they enjoyed the class and I felt included.

There was also time for those who exhibited to briefly review one of their models, which was a good idea to create an opportunity for interaction. When I peeked into the class on a modular piece by Francesco, another special guest, they were folding while chatting around a round table and seemed to be having fun. I realized that creating that kind of atmosphere is also important. I was worried about communicating in English, but I was relieved when Brill told me, "You did a great job."

And so, my three-week marathon of overseas conventions (Japan is now overseas for me) came to an end. Including the MFPP, which I was invited in April, I have participated in four conventions this year alone. I was very warmly welcomed at every convention and had a wonderful time. Thank you very much. I felt that as a creator, I need to break out of my shell and explore new techniques and expressions.

I was greatly inspired by the exhibition and lecture by Katsuta and Katsuzaki in Korea, and almost overwhelmed. As an instructor, I would like to create more models that are challenging and have surprises but are also completed within the time limit. Up until now, I feel like I've been too conscious of making models that will stand out in an exhibition. Conventions are fun.

They are full of experiences that you can't get by reading a book and folding alone. If you've never tried it, I recommend you to be brave and participate! I'll report if I have another opportunity like this.

■ Pictures

Page 16 bottom right: The author [Tetsuya Gotani] (far left) enjoying a friendly reception with Jun Maekawa, Seiji Nishikawa, Eiko Matsuura, and Vice-Chairman Makoto Yamaguchi.

Page 17 top left: The author [Tetsuya Gotani] as a

lecturer in a hybrid session

(Page 17) Makoto or Not? Memoirs by Makoto Yamaguchi

Part 8 – In Hopes to Promote Origami Tanteidan

The Origami Tanteidan have been around for 35 years. For that long, we have been publishing the Origami Tanteidan Magazine without interruption. During that time, we were unable to sell all the magazines (back issues), and our warehouse is now full to the brim. The contract for the warehouse we are currently renting is about to expire.

It would be a waste to throw them away or cut them up, so we wondered if there was some way we could make them useful. One way to do this was to distribute the magazine for free to facilities and organizations that would catch the eye of people who are not yet familiar with it.

■ Objectives

We aim to increase awareness of the Japan Origami Academic Society (JOAS) and the Origami Tanteidan Magazine and to increase the number of subscribers, which will lead to one of the objectives of the Japan Origami Academic Society, which is to "promote specialized research on origami and the growth of origami."

■ Target audience and distribution method

- University libraries and university laboratories (mathematics, engineering, modeling, etc.)
- Junior high schools, high schools, local libraries
- Local science museums
- Other local government organizations
- High school and university origami clubs and above will be targeted, and back issues will be boxed up and sent cash on delivery.

Not for individuals.

We would like to ask for your help in introducing and coordinating such facilities and organizations.

We are considering the contents to be about 10 to 20 issues randomly selected from the back issues. Please note that we cannot specify the Volume/issue to be sent. The facilities and organizations are free to use the magazines they receive as they wish. The society will select the distribution destinations.

■ About "Origami Tanteidan Magazine"

This magazine is an official journal published by the Japan Origami Academic Society (<https://origami.jp/>). It is a specialized magazine that allows you to enjoy origami from every angle, with folding diagrams and color photos of new complex models, seasonal ones, research articles on creative methods and history by experts, interviews with creators, essays, and more.

•Published every other month (on the 25th of odd-numbered months)

•Approximately 42 pages of text / 8 color pages (as of the 35th issue)

•Annual subscription fee: 4,800 yen (as of the 35th issue). For more information about Origami Tanteidan Magazine, please visit our website:

<https://origami.jp/magazine/about/>

(Page 18) From the Bookshelves of the JOAS Library

Book #97: Origami, La Era Nueva" by Kasahara Kunihiko

Article by Kango Kariyazono

Kango Kariyazono = Originally from Kagoshima Prefecture, born in 1993. At the 29th Origami Tanteidan Convention in August, I had the opportunity to meet the two members of ORIGAMI PRO thanks to this corner (photo center: author (Kango Kariyazono), left: Kim Jin-woo, right: Yoo Tae-young). Thank you!

■ [Introduction]

The book I would like to present this time is "Origami, La Era Nueva" (Sanrio, released in 1989, Figure 1). It is the third of five books in the "Viva! Origami Series (Figure 2)," which is widely known as the bible for origami enthusiasts. The first book in the series, "Viva! Origami," and the second book, "Top Origami," were introduced by Hideo Komatsu in this column in issue 109 of Origami Tanteidan Magazine (7th volume) and issue 118 (16th volume), respectively. It is a little embarrassing for me, a novice, to introduce a sequel to a book introduced in the early days of this column, in this column's 97th volume, but please bear with me.

■ [A signpost to the "Origami, La Era Nueva"]

This book was released in 1989, four years after the release of the second book in the series, "Top Origami," in 1985. At the time, the world was filled with excitement and anxiety, expecting the 21st century to be 10 years away, but this book suggests that the origami world was already in the new century a step ahead of the rest. First, look at the cover (Figure 1). I feel that this cover, whether intentionally or not, tells us where this book stands in the history of origami. The cover features John Montroll's "Alligator," which is introduced in this book. The stepped fold pattern on the tail, which gives a three-dimensional feel, dynamism, and texture to the geometric design, is eye-catching. The "Alligator" appears to be walking lively on the beach, and the crease pattern (a new trend) seems to be washing over the beach like waves. Nowadays, it is not uncommon for a book cover to

feature an origami work and its crease pattern side by side, and in fact it has become a standard design, but in the case of this book, it was not only "new for its time" but also had a special meaning. This is because the crease pattern takes up a much larger space than the origami work itself, and this crease pattern is not for the "Alligator" that adorns the cover, but of another model (Jun Maekawa's "Rhino") also featured in this book. This seems like a historic moment when, as the crease pattern folding, and various design theories introduced in "Viva! Origami" gained recognition, the crease pattern was separated from the origami work and was treated as a standalone work worthy of being featured on the cover of a book.

At the beginning of the book, the author, Kasahara, also writes about the circumstances surrounding the release of this book. Kasahara had been preparing a sequel for about three years since the release of "Top Origami," but after interacting with origami enthusiasts both in Japan and abroad, he experienced a significant expansion in the amount of content he wanted to introduce in the book over the past six months, which made him feel that "La Era Nueva, or the new century of origami had already begun." Thus, this book was originally planned to be a single volume, but ended up being released as two separate volumes, and was born along with the fourth book in the series, "Origami New World" ("New World" was released the same year as this book, 1989). Perhaps as a remnant of being split into two volumes, "La Era Nueva" and "New World" share the same subtitle, "A Collection of Masterpieces by Masters." These two books, like "Viva! Origami" and "Top Origami," are full-volume books that follow the same characteristic of being books that teach not only how to fold creations but also the cutting edge of origami, and even though they are separate volumes, they are still over 270 pages long. It is this momentum that conveys to readers the "beginning of a new century of origami" that Kasahara felt at the time.

■ [A book from the perspective of someone born in the Era Nueva - new century]

This book is composed of four chapters and one appendix. Each chapter introduces the relationship between origami and geometry, the use of basic shapes, the possibilities of rectangular paper, and Montroll's origami works. I was born in the Era Nueva new century origami, after this book was released. By the time I became interested in origami, it had been about 20 years since Origami, La Era Nueva of the 1980s, and to be honest, the relationship between origami and geometry, the concept of basic shapes, and the appeal of works using rectangular paper were already widely known. However, if you come to this

book thinking that you already know all of this, you will realize that you have only enjoyed that information through origami works that contain the essence of this book. This book had the potential to create a new trend among those born in the new origami century, in that it allows you to directly relearn concepts that you thought you knew. For example, in the first chapter, "Gorgeous Geometric Forms," mountain and valley folds in the real world are reinterpreted geometrically to explain "what it means to fold" (Figure 3), and this philosophy leads to the introduction of Toshikazu Kawasaki's Rose model and "Tatou (Folding Paper)" series, which are "masterpieces of masters." It is interesting that origami, which has been discussed in this book from a geometric perspective, returns to the expression of natural objects such as plants, and the expression of the beauty of geometric shapes using origami. Also, we can see the bizarre appearance of traditional origami "payarite (small bird)" (ed. note: called pajarita in Spanish) and "cup" being repurposed into modular origami. By looking at these traditional models that were the source of their origins after breaking them down from a geometric perspective, they can be appreciated not only as bizarre shapes, but also as very logical works.

Chapter 2, titled "How to Use Bases Effectively," begins with an explanation of what a base is, and introduces "masterpieces by masters" that utilize bases. What I like about this chapter is that it introduces bases not just as shapes, but as techniques to fulfill the desire to "create something new." We often spend our time thinking about which parts of which base are used in which models, but if we stop and think about it, we realize that somewhere in our origami, there is surely a base that has been modified, remodeled, and partially taken out, and has lost its substance.

Chapter 3 discusses "the great potential of rectangular paper." As an example, it shows the process of creating a crab, in which a crab folded from a square (with unbranched claws, a pair of legs, and cuts to expose the eyes) can be reconstructed from rectangular paper, allowing the eyes, branched claws, and four pairs of legs to be folded out without any cuts (Figure 4). At the beginning of this chapter, Kasahara describes rectangular paper as "a shape that grants wishes," but we should not take this literally to mean that a rectangle is an excellent shape for origami. Citing the geometric perspective introduced in Chapter 1 and the concept of bases introduced in Chapter 2, he conveys that there is a suitable paper shape for each work, and that this may be a square or a rectangle with a certain aspect ratio. Chapter 4 is a collection of Montroll's works. In general origami books, the author often explains the work, but in this book, you can

enjoy the commentary and evaluation of the author, Kasahara, rather than Montroll. The mammal models, which branch out from the same folding process and are made in unique ways, and the rhinos, elephants, sharks, and prehistoric creatures, whose characteristics are depicted at 22.5 degrees, are fascinating models in terms of both the process and the finished product. Kasahara describes Montroll's works, along with Maekawa's works, as "works like intellectual puzzles," and comments that "these awaken intellectual curiosity." By the time you have read chapters 1 to 3 of this book (as well as the previous work in the series) and come to understand some of Kasahara's geometric perspective and sensibility, you should be able to reach a similar evaluation. You can also absorb it as one of the criteria for evaluating your own work, so depending on the reader, it may be a good opportunity to learn something new from the past.

■ [Conclusion]

This time, we have introduced "Origami, La Era Nueva", the third book in the "Viva! Origami Series". For those born in the new century of origami, this is a wonderful book that allows you to feel the new trends in origami of the 1980s and start a new trend in your own origami history. We hope you will pick up this book along with the other books in the series. When you encounter this book, you will see the universe in a single piece of paper (quoting the book's catchphrase).

■ List of Figures

Figure 1 – Cover. A new trend in origami.

Figure 2 - Viva! Origami Series. All the books have impactful cover designs.

Figure 3 - Explaining the act of "folding" from a geometric perspective.

Figure 4 - Crab's creative process. Searching for the right paper shape for his model.

(Page 37) Orisuzi ("Fold Creases") A Community to Be Grateful To By Yusuke Hirahara

In the world of origami, there are many who are salaried workers and enjoy creating models and participating in events as a hobby.

I am one of them. I have been working for five years, and although I thought I was a student until recently, I have now one foot in the door of mid-career employment.

Comparing the past five years to my time as a student, I feel that it has become much more difficult to increase the number of friends and acquaintances in everyday life. The human relationships at work are

limited, and there are not many employees of the same age. In addition, due to differences in where I live and our living environments, the frequency of contact with close friends from high school and university is decreasing.

Amidst all this, there is one community that I am very grateful for, where I have several friends that I have met regularly for over ten years. That community is the origami one.

Looking back, I made my first origami friends over ten years ago, when I started creating origami as a high school student.

Soon after entering university, I met Kariyazono, a senior in my department two years ahead of me, who is currently writing a series of book reviews for this magazine.

Furthermore, when I was an undergraduate, origami clubs were being established one after another at universities across the country, and there was a movement to actively promote exchanges between universities. I met around 20 origami friends of my generation there. Thanks to our common ground of origami, we have remained in touch even after entering the workforce, and I think it is wonderful that we still meet on various occasions. Some of my friends even meet for unrelated reasons.

And what makes me happiest is that I am still making more and more friends and acquaintances. At the convention the other day, I was able to talk to several people for the first time.

So, the proportion of my friends and acquaintances who are involved in origami is steadily increasing. When I was an elementary and junior high school student, silently folding models from books by myself, I could never have imagined that this would happen.

Now that I am getting to know more and more people who are interested in origami, the next thing I need to do is drag my friends who are not interested in origami into the origami community. To do that, I first need to increase the number of friends who are not related to origami.

(Page 38) One Thousand and One Nights of Origami

By Jun Maekawa

Story 8 - Fold in silvery paper. Silver origami plane.

The following was written in the first collection of poems by young poet Akane Yasuda, "Crystalline," published last year.

"A silver airplane folded from silver paper to go to the graveyard of my broken dreams."

Akane Yasuda

The expression "graveyard of dreams" is reminiscent of a line from Anne of Green Gables: "My life is a perfect graveyard of buried hopes." Anne said, "I say this to comfort myself whenever I'm disappointed." When she asked her adoptive mother Marilla if anyone's hair changes color when they grow up, she was coldly told, "I don't know." In the graveyard inside Anne Shirley's heart, there are rows of gravestones where hopes for black hair and hopes for having a family are buried.

However, the cemetery where Anne buried her broken dreams has the brightness of a flower field in a park, as she herself said, "It resonates so beautifully and romantically." However, I don't have such an image in my mind, and the closest I can get is the image of a bookshelf in my heart, lined with books that have been left half-read or not yet opened.

So, I have bookshelves inside me, but I don't have a cemetery. So, I don't need a silver airplane to get there, but it's interesting that the poet associated the origami airplane as a spell (?) to go to the cemetery in her heart. In fact, anyone who likes origami will have the feeling that the act of folding origami is like meditation, or that it dives deep into the heart. And speaking of silver paper, the following tanka poem also comes to mind.

"If you fold it with silver paper, it becomes even lonelier, and what kind of dog it is, a dog without eyes."
Ishikawa Minami

Is the loneliness of silver paper a feeling that is far removed from the nature of a living thing? Some modern origami models have eyes, but it is true that many origami animal models have no eyes. This loneliness is a nostalgic, gentle loneliness that is like Anne's "Graveyard of Hope."

(Page 39) Crease Pattern Challenge Challenge 153: Mouse (Standing)

By Seishi Kasumi

Created: 2024/05

Paper Size: 30x30cm

Height: 12cm

This model was created based on the 30-degree mesh structure. At first, I planned to make the front teeth, whiskers, and eyes, but if I tried to make the face more realistic, it would lose the cuteness and smooth feeling of the mouse (due to my lack of technical ability), so I gave up on making eyes and teeth this time. However, there are still some traces of whiskers. Mice have tails that are as long as their bodies. To make enough space for the tail, I arranged an equilateral

triangle as shown in (Figure 1). This arrangement, in which two vertices of the equilateral triangle that will become the hind legs are placed on the edge of the paper and the remaining one is placed inside the paper, allows you to freely adjust the size of the area by changing the number of equal divisions (16 in this model). Although it is less realistic than the original plan, I paid particular attention to the shape of the ears to bring out the characteristics of the mouse. This is the characteristic rectangular fold on the head side. In particular, the folds that make up the ears and neck area naturally connect to the folds for folding out the toes of the hind legs, and this is the most important point. In addition, I like the hexagonal structure used to give the ears a rounded feel. <A> in the crease pattern is the base that can be collapsed flat. The lower right half is what it looks like when it is three-dimensional, but there are many parts that do not express the three-dimensional shape well (parts where only the mountain fold lines come together), so please use it as a reference diagram for finishing. When is folded, it will be almost complete, but fine finishing is required for the tail and hind legs. As an auxiliary reference to help you with the folding, I have included the irregular neck area <1/4 of the whole shown> (Fig. 2) (Fig. 3). After folding (Fig. 2), change the position of the folds as shown in (Fig. 3). It can be folded flat in <A> in the crease pattern, but it can only be folded flat for a short period of time around (Fig. 3). The entire model will be folded while maintaining a three-dimensional shape. Each part can be folded locally flat, so make good use of this and continue folding.



◆ Registration for the 14th Origami Tanteidan Nagoya Convention

● Dates

Saturday, December 7th, 2024 - Sunday, December 8th, 2024

● Venue

Aichi Institute of Technology Jiyugaoka Campus Main Building, 1 minute walk from Jiyugaoka Station on the

Nagoya Municipal Subway Meijo Line.

● Number of participants

200

● Participation fee

Price for 2 days. (Note: The price is the same even if you only participate for one day)

[Adults] 5,000 yen (estimated)

[Students] 3,000 yen (estimated)

[Elementary school students] 7,500 yen (price when one elementary school student is accompanied by one guardian)

*Elementary school students and guardians must attend the same class. Elementary school students cannot participate alone.

● Banquet Dinner

7th (Saturday) Only for those interested. (High school students and above)

Participation by junior high school students and below is not permitted.

[Adults] 5,000 yen (tentative)

[High school students] 3,000 yen (tentative)

● Application

Information on how to apply will be posted on the Origami Tanteidan Tokai Tomo-no-kai local area group website after October.

http://anabas-plan.net/joas_toukai/

● Exhibition and contest

Models can be exhibited at the venue. A creative origami contest (limited to your own original works) will also be held. Convention participants will vote for one Grand Prize winner and two Excellence Prize winners, who will be awarded prizes. We look forward to receiving many applications.

Only convention participants will be able to participate in the exhibition and contest.

● Looking for origami class instructors

We are looking for people who can teach at the Nagoya Convention. Why not take this opportunity to participate as a teacher? For details, please check the Origami Tanteidan Tokai Tomo-no-kai local area group website (http://anabas-plan.net/joas_toukai/).

● Origami Instructor Certification Exam

During the Nagoya Convention, we will also be holding an instructor certification based on the Japan Origami Society Origami Instructor System. We are looking for test applicants, so if you would like to obtain the qualification, please check the website.

Special guests

The special guests will be young Korean artist Jeong Jae-il sponsored by JOAS and Han Ji-woo by Origami House. We hope that everyone will enjoy a fun time interacting with them.

JEONG JAE IL

Born in 1993, in Korea. Currently working as a semiconductor engineer and also active as an origami artist. Value incorporating the feelings and atmosphere received from various awards into my work. Rather than precise depiction of the subject, always try to make the most of the unique beauty of origami.

https://www.instagram.com/jaeil_origami/

HAN JI WOO

Born in 1995. Active as a creative committee member for the Korea Origami Association. Every year, participates in the publication of the "ORIGAMI PRO" series, and in charge of the models and "test folding." Interested in creating human-figure models using the box split technique.

https://www.instagram.com/jiwooo_origamist/

◆ 29th Origami Tanteidan Convention Report

By Seiji Nishikawa

The 29th Origami Tanteidan Convention, held over two days on August 10th and 11th, was a great success. As with last year, we were able to use the Yayoi Auditorium at the University of Tokyo, thanks to the kind arrangements of Professor Hiroyoshi Iwata of the Graduate School of Agriculture and Life Sciences at the University of Tokyo. This year, the COVID-19 restrictions were lifted and we expanded the number of local participants to the venue's capacity to 300 people, but just like last year, the capacity was reached in about three days. We are very happy that people are looking forward to the convention. On the other hand, we also heard some people say they were disappointed that they could not participate.

One of the reasons the capacity was reached so quickly is that for safety reasons, parents are required to attend for elementary school students and younger, so many families attend. This also shows that there are many families who are looking forward to this summer's event, and we were glad to hear people say during the event, "I'm really glad I brought the kids."

The convention's basic style was to have a special guest lecture on the first day, seven parallel origami class programs (one more than last year), one of which was streamed on Zoom, and 70 people registered to participate [online] only in the Zoom stream.

The special guests for this event from the Yoshino Fund were Tetsuya Gotami, an accordion player living in France, and Kim Jinwoo, who also coordinates young Korean artists. Both entertained the participants with very interesting lectures and origami classes. Recorded origami classes, special guest lectures, and exhibition

tours streamed on Zoom will be available to watch until the end of December, and participants who have already registered have already been notified by email.

This time, on the substitute holiday, Monday, August 12th, an academic symposium (hosted by Academic Transformation) was held, chaired by Professor Tomohiro Tachi of the Graduate School of Arts and Sciences at the University of Tokyo (board member of the Japan Origami Academic Society). So, I believe many people enjoyed the three-day origami events.

◆ WOD 2024 10/24 ~ 11/11

WOD (World Origami Days) is the period from October 24th, the birthday of Lillian Oppenheimer, who contributed greatly to the growth of origami around the world, to November 11th, Origami Day, which was established in Japan in 1980, with the goal of spreading origami to more people around the world. OrigamiUSA and JOAS have been working together since 2011 to further disseminate WOD.

World Origami Days 2024, hosted by OrigamiUSA, will take place from October 25 to November 12, 2024 (US time) with 19 days of origami classes offered remotely. Registration will open on September 16.

OrigamiUSA is pleased to celebrate World Origami Days (WOD) remotely with origami enthusiasts around the world via Zoom. OrigamiUSA's OrigamiConnect and PCOC teams have organized 19 days of online origami classes from October 24 to November 11, 2024. Each day will feature a different origami category (tessellation, unit, shaping, etc.). This year, we have changed the weekend hours to allow participants in more time zones to join the live broadcast. Monday through Friday hours are late afternoon/evening Pacific Daylight Time (PDT), and Saturday and Sunday hours are morning PDT. Please refer to each class for the specific hours for your time zone. World Origami Days 2024 will be a fundraising event for the 2025 Pacific Coast OrigamiUSA Conference (PCOC). For more information, please visit the OrigamiUSA WOD2024 website below.

<https://origamiusa.org/wod2024>

By Marcio Noguchi

[My WOD Report]

My WOD is a project hosted by JOAS that started in 2014 to present origami models using social media. During the WOD period, please post your favorite folded work on social media (or the WOD page for Facebook). Use the "WOD Entry Sheet" to take photos to be published. Download the designated sheet from the official website of the Japan Origami Academic

Society, fill in the name of the work, the name of the folder, the name of the creator of the work, and the region (country) of residence, place the work on the sheet, and take a photo. You can also paste the written part into the photo (see the explanatory photo on the WOD page). The hashtag is #MyWOD. The submitted photos will also be used for the art museum exhibition.

[Art Museum Exhibition]

Photos of "My WOD" posted on Facebook, X (formerly Twitter), and Instagram, as well as photos of works submitted to the "Origami Theme Exhibition", will be published on the WOD page (to be announced on the JOAS official website) from October 24th.

[Origami Theme Exhibition]

The theme is the Chinese zodiac sign for next year, the snake. It does not matter if the submission is your original creation, new or old.

◆ The 37th Origami Science, Mathematics and Education Research Conference (Kyushu University)

By Jun Maekawa, Kazuya Saito (Kyushu University)

The 37th Origami Science, Mathematics and Education Research Conference will be held on Saturday, November 30th and Sunday, December 1st at Kyushu University's Ohashi Campus. The conference has been held over two days since last year as in-person events were resumed [after Covid restrictions], and this year will also be a two-day event. The presentations by each researcher scheduled for the second day will also be streamed online.

The research topics presented will cover a wide range of subjects, including mathematics, engineering, biology and history. Some of the content will be highly specialized, but this will be a good opportunity to learn about the breadth [and depth] of origami research beyond the field, so we hope you will join. The conference will also focus on a workshop format that allows participants to create models with their own hands. The schedule is outlined below.

- November 9th: Deadline for presenters (apply online. There are no qualification restrictions for presenters)
- November 13th: Application begins
- November 30th, December 1st: Conference days

The Ohashi Campus, Kyushu University Faculty of Design is conveniently located, a 5-minute walk from Ohashi Station on the Nishitetsu Tenjin Omuta Line, close to the center of Hakata. The Faculty of Design aims to train designers who have scientific knowledge of engineering and technology, deep insight into

humans and society, and creative artistic sense. The predecessor, Kyushu Institute of Design (1968-2003), had a progressive slogan of "humanizing technology" and taught how to adapt technology to human life. The venue, which bears the name "Art and Design," which means design in a broad sense, is a fitting place for the presentation of research on origami, which develops across fields. A campus tour is also planned for the first day. In addition to introducing unique research facilities such as the Biofood Lab and Ceramic Lab on the Ohashi Campus, there will also be demonstrations of a micro-CT scanner and a ceramic 3D printer.

◆ Tomoko Fuse Northern Alps International Art Festival 2024

Tomoko Fuse will be exhibiting at the Northern Alps International Art Festival 2024, which will be held at the foot of the Northern Alps in Omachi, Nagano Prefecture. Her work "Paper Garden," in which the softness and shadows of paper create a tranquil space, will be exhibited in the vast tatami-floored room of Shinano Kizaki Summer College, a community college that has been in operation for over 100 years.

[Schedule] Friday, September 13, 2024 to Monday, November 4, 2024 (National Holiday) Closed on Wednesdays

[Opening hours] 9:30-16:30

[Venue for Fuse's Artwork] Shinano Kizaki Summer College (7243 Hirakizaki, Omachi, Nagano Prefecture)

[Admission fee] 300 yen or present an "Artwork Appreciation Passport" that allows you to view most of the art festival works

[Parking] Available (about 5 minutes' walk to the venue)

[Website] <https://shinano-omachi.jp/>

Tohoku Tomo-no-kai Local Area Group ~ Collaboration with Origami Group ORUXE at Tohoku University Festival

Since its inception in 2016, Tohoku Tomo-no-kai local area group has been working with the origami group "ORUXE" at Tohoku University. At the university's festival, we have been exhibiting our works together and giving lectures to visitors. This year will be our first participation in four years [after Covid restrictions].

The theme of this year's university festival is "Spell," so after discussing with ORUXE representative Takahashi Rei, we decided that our themes would be "Spell Autumn" and "Spell with Cranes."

For "Spell Autumn," ORUXE and members of the Tomo-no-kai local area group will bring their own

models. We would like to spell out autumn while displaying models of plants, animals, insects, etc. Meanwhile, we have decided that visitors will fold various sizes of "cranes" and spell out the "cranes" on branches that would look like a bonsai tree. We also plan to set up a corner where you can freely fold while looking at an introduction to the Japan Origami Academic Society and the Tanteidan Magazine.

The Tohoku University festival will be as follows. We were only able to secure a spot for one day, and only on a weekday, so it may be difficult to come, but we hope you will be able to join us.

Date and time: Friday, October 25, 2024, 9:00-16:00

Location: Tohoku University, Kawauchi Campus, C203 classroom (50-person classroom)

Exhibition theme: "Spell Autumn"

Participation theme: "Spell Cranes"

Exhibition contents: Origami work display, visitors' creation of "crane" bonsai, introduction to the Japan Origami Academic Society, complex origami experience, etc.

Contact: Fukushima Kuniyuki, representative of the Origami Tanteidan Tohoku Tomo-no-kai Local Area Group

Email: K-fuku@mve.biglobe.ne.jp

◆ Origami House Gallery reopens

Origami House Gallery has reopened to the public, with a fee and reservation system.

In reopening the gallery, which was closed during the COVID-19 pandemic, there will be restrictions on the length of stay and the number of people allowed in.

Opening hours: 11:00-17:30 (entry until 17:00)

Stay time: up to 30 minutes

Number of people: up to 5 people per group

Tour fee: 300 yen per person (free for members of the Japan Origami Academic Society, reservation required)
*Half of the tour fee will be donated to JOAS (Japan Origami Academic Society).

Since reopening, the number of visitors has been 105 visitants in June, 146 in July, 159 in August, and 26 in September (as of September 10), totaling 130,800 yen in tour fees, of which 65,400 yen was donated to JOAS. Please use the form to make a reservation for a tour: <https://x.gd/TWUix>



- プリントおりがみ 15.0×15.0cm 8枚
- プリントおりがみ 30.0×30.0cm 2枚

株式会社トヨー
http://www.kidstoyo.co.jp

●写真は印刷ですので実際の商品と色などが多少異なる場合があります。
※表示価格には消費税は含まれておりません。
※内容・デザインは一部変更になる事があります。
本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12
TEL03-3882-8161(代)

